うませるきかい

蕎麦饂飩

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『うませるきかい』

それは、６Ｖのメタ〇ンである!!

ファンタジーな世界で絶滅危惧種を再生するために種馬が必要とされた。

これはそういうおはなし。

目次

Episode1 きっとその生涯に意味は無く ―― 1
Episode2 貫く事 ―― 7
Episode3 奔る悦び ―― 17
Episode4 やさしいせかいののぞきかた ―― 27
Episode5 あにまる☆レース場最速理論 ―― 35
Episode6 Let it be ―― 45
Episode7 しょく人 ―― 50
Episode8 悪意 ―― 55
Episode9 ししゃ ―― 59
Episode10 あなたに届きますように ―― 65
Episode11 神は自ら助く者『だけ』を助く ―― 69
Episode12 敗者としょうしゃ ―― 74
Episode13 貴方に捧ぐピローソング ―― 85
Episode14 侵攻 ―― 91
Episode15 死の先を征く者 ―― 97

Ｅｐｉｓｏｄｅｌ　きっとその生涯に意味は無く

「あなた自身には何の価値も無いですが、あなたの遺伝子には立派な価値があるのですよ」

憧れていた女性から言われたその言葉は今も耳に残っている。

僕には何も無い。だけれど、僕と子供を作る事を望む女性達は決して少なくは無かった。

そして、それこそが同族の人間達からは疎まれる原因にもなっている。

割り切れれば良かった。

僕と子供を成したい美しい女性達と行為を行う環境には事欠かないのだと。

しかし、それでも僕は――――

Ｅｐｉｓｏｄｅｌ

此処は人間やエルフやリザードマンなど様々な種族が混在する世界。

しかし、その中でも人間は科学の力を以って、他の民族を駆逐したり支配したりした。

エルフを様々な用途の奴隷にしたり、フェアリーの標本を作ったり、獣人の毛皮を剥いで飾ったり、

オークを食用家畜にしたりする程度には、人間は圧倒的な勢力を誇

り、傲慢になっていた。
他の民族など対等とは想定もしていなかった。
人間は神に選ばれた尊い存在で、それ以外の生命を全て自由にして良いのだと思っていた。
しかし、『障者』がこの世界に表れてからは世界の在り方は一変した。
障者とは生きた生命が触れると気がおかしくなってしまう恐ろしい存在だった。
それらは科学技術があるところへと優先してやってきた。
障者には科学的で物理的な攻撃手段が通用しなかった。
土地や住民を犠牲にした核攻撃でさえも通用しなかった。
ただ、障者には魔力を備えた攻撃だけは障者に通用した。
知性ある人型生命体の総称、『人累』の中でも人間達だけは魔力を持たなかった。
オークでさえ、身の内には魔力を持っているのに人間にはそれが無かった。
だから人間達は次の世代の人間達には魔力を持つように遺伝子を調整した。
ただ一人の天才によってその調整は行われた。
生まれ持って魔力を持つようにデザインされた人間達は極めて科学的に魔力を運用できるようになった。
他の亜人達の魔法が燃料(魔力)に直接火を付けて松明を燃やすようにして光を生み出すと例えるならば、
新たな人間達の魔力運用は魔力をエンジンのように燃焼させて生み出した魔力流で電球のように光を生み出す事が出来た。
しかし、新たな人間は魔力を持つように生まれて未だ日が短い上に、普段の生活には日々衰退していく科学技術にしがみついていた。
故に、まだ障者に対抗できる決定的手段とはなっていなかった。
逆に日頃から魔力と共にあるエルフやフェアリーはそんな人間とは裏腹に障者に対抗できていた。
しかし、エルフ等はその種族数を大きく減らしていた。

大量に連れ去られて消費された事もあるし、エルフは劣勢遺伝子の塊だったのだ。
エルフは他の種族の者と子を為した場合、ほぼ完全に相手の遺伝子のみが発現する。
エルフの面影は見た目所か遺伝子の中にさえ残らない。
強靭な優性遺伝子を持ち、相手の遺伝子を無視して己の種族の子供を作るオークだけで無く、
普通程度の遺伝子発現強度しか持たない人間が相手でも、生まれてくるのはほぼ完全に人間の子供だった。
人間が搾取して個体数を大きく減らした上に、魔法自体を使う事が出来ない代わりに、
身の内に流れる魔力のジャイロ効果によって、魔法に対する抵抗が強いエルフの天敵であるオークが人間の食肉牧場から脱走して昔のようにエルフを襲っていた事も大きかった。
オークは魔法を使うエルフに強く、人間はそのオークに対して圧倒的に強い。
オークはその巨体と柔らかい肉質故に、魔力を伴わない火炎攻撃や加工された金属による斬撃などに極めて弱かった。
故に、障者が来るまでは野生のオークは大きく数を減らし、牧場で人間の食用肉として飼われる養殖オークが増えていた。
だが、障者によって襲われた牧場から脱走したオーク達は己の種族の個体数を増やすために、
遺伝子発現強度が弱く、自身に種族特性的に圧倒的に不利なエルフを襲い、己の子供を産ませていた。

そんな中、人間に亜人の中で語られていた伝説の子供が誕生した。
種族発現強度０（ゼロ）の男の子であった。
生まれて直ぐ遺伝子をスクリーニングされる人間達にはすぐにそれが発覚した。
嘗てはその伝説の存在は、人間達の勢力を何度も低下させた忌み子として人間達の中には伝わっており、殺される事も多くあったとい

う。
嘗てのように人間達が支配者であった頃ならば、余計なチャンスを他種族に与えないようにその少年は消されていた。
しかし、今では事情が異なる。
その他種族に頼らなくては人間の存続が危うかった。

エルフと交わらせれば、人間の因子を一切与えず純粋種のエルフを孕ませて繁殖できる。
場合によってはエルフ意外の不純物まで破棄して強力な先祖還りまで行わせる遺伝子を持つと伝説では語られていた。
実際に、古代には誘拐されたその特性を持つ少年がエルフの女王や貴族達を孕ませ続けて、ハイエルフ軍団を作り人間に痛手を与えた事実もあった。
エルフ属などの遺伝子発現強度の低い種族にとっての希望であり、人間にとっては余程の事が無ければ忌むべき存在だった。
結局は人間によって、ハイエルフとして生まれた者は一人を除いて殺し尽くされ、
また、その製造原因となった伝説の存在は人間によって抹殺された。
伝説の存在、それは――――早い話Ｖ６メタ○ンである。
体力・攻撃力・防御力・素早さ・魔法攻撃・魔法防御全てに優れた子を成す。
その際、己の種族は一切産ませる事無く、完全に相手の種族で子供を誕生させるＶ６のメ○モン。
それが、伝説の存在、『うませるきかい』だった。

魔法技術の提供と交換条件に現代に生まれた『うませるきかい』の少年、エコーはエルフの国へと貸し出される事となった。
少年に己の未来を決定する権利は無い。
これは種族同士の会談で決められる規模の出来事である。
そして、生まれたときからお前は『うませるきかい』だと育てられ

た少年は、自身の未来に関しては諦観しか持っていなかった。
少年は『うませるきかい』である事以外にも己の価値を周りに認めて貰おうと様々な事に努力をした。
しかし、その成果は全て『うませるきかい』としての価値の前では完全に霞むものだった。

エルフの国に貸し出されてから、エコーはこれまでの忌み子としての扱いとは打って変わった種族の救世主としての扱いを受ける事となった。
そして、その親切にしてくれるようになったエルフ達の女王に初恋に似た憧れを抱いていた。
しかし、女王自身が告げた真実により、少年は自分自身が如何に無意味で、己の遺伝子の抱き合わせにもならないものであるという事を、
完全に自覚させられた。
エルフの国での一見幸せな生活で、心を開きかけたところで、開いた心の内側から粉々に壊された。
そもそも、上の世代にとっては、『うませるきかい』でない人間には良い感情などあるわけも無く、
人間は嫌いだが、『うませるきかい』ならば好きだという時点で、人間の少年としてのエコーの人格には何の価値もあるはずが無かったのだ。
彼の努力も、彼の心も、彼の『うませるきかい』以外の全ては初恋の女性にとって何の価値も持たなかった。

そして、年月が経ち、青年へと変わり始めた頃、少年は少女と出会った。

「この子は私の娘、いずれ生まれるハイエルフの母になるもの。
あなたが一番最初に孕ませる相手ですよ。
挨拶なさい、フリージア」

エルフの王国の最深部で、嘗て憧れた女性が己の娘の肩に手を伸ばしながらそう告げた。
「ですが…人間……いえ、仕方ありません。
どうぞ私にハイエルフを生ませて下さい。お願いします」
己より僅かに背が低いものの、スラリとした長身と輝くような赤みがかった金髪と透き通るような肌を持つ少女は、
『うませるきかい』に向けて頭を下げた。
その諦めた瞳は何処か親近感があるとエコーには思えた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　貫く事

エコーとフリージアは何度も交わった。
とは言え、互いに一言も必要な業務要件以外は発する事無く、作業のように種を植えるだけの作業だった。
互いに相手と己が、畑に蒔く種であり、種を植えられる畑であると理解していたからだ。
そこには諦観以外のものは存在しない。
絶望も欲望も何も無い。ただ、諦観だけがそこにあった。

ある日の夜、今日の作業を始めようとしていた頃、オーク達が攻めてきた。
エルフだけで無く、オークも己の種族数を増やしたかったのだ。
人間国からもたらされた警報器がオークを識別して甲高い警報音を鳴らす。
派手に使われた文明の利器は障者を呼び寄せる事となるが、内部を外に出ない魔力が循環しているオークには障者は他の種族ほど恐ろしくは無い。
言い換えれば気が狂う魔法そのもののような存在である障者は、触れる事で相手を狂気に落とし込むが、
魔力抵抗の高いオークにはその影響は少ない。触れる以外の攻撃手段を持たない障者が触れ続けてオークを狂わせる前に、
その膂力を持って叩き潰せば良いだけだからだ。
その意味ではオークは非常に障者に優位であった。
オークは障者が寄ってきてエルフが襲われた場合、エルフの戦力が低下する上に、精神がおかしくなろうが孕ませる畑としての役割には問題が無いと思っていた。
寧ろ、精神が狂った方がオークの子供を産むのが嫌だと自害されなくて済む分好都合だと考えていた。
実際、オークは捉えたエルフを敢えて障者に襲わせて自我を狂わせ

た後孕ませた事だってあるくらいだ。

フリージアは警報を聞き、仲間達を護る為にベッドから抜け出して鎧を身につけて槍を手に取って打って出ようとしたが、己の母親である女王に止められた。

「あなたは子作りに専念しなさい。

戦いは他の者に任せるのです」

「お母様っ、同胞が汚らわしい豚に襲われるのを見て見ぬ振りが出来ようもありません。

私には力があります。仲間を守る力がこの手にはあるのです」

凛々しくもそう言い放つフリージアだったが、女王はそれを認めはしなかった。

「…フリージア。

あなたはハイエルフを多く生む事だけを考えれば良いのです。

ハイエルフなれば豚たちの魔力抵抗など紙のように引き千切れるでしょう。

そうなれば、今此処で普通のエルフが犠牲になろうと、きっとそれ以上の救いがもたらされます。

この王国の救いは、あなたの子供達なのです。

解ったら寝室に戻りなさい」

フリージアは言いたい事はいくらでもあった。

しかし、それを女王に言うだけの力は彼女には無かった。

「解りました。お母様」

「ええ、それで良いのです」

フリージアは再び寝室に戻った。

だが、言葉を交わす事も無い作業相手に目を向ける事無く、彼女は部屋の窓を開け放った。

同居人はそんな彼女に一瞥もくれる事は無かった。

フリージアが窓から脱出しようとする様を見て、彼は止めようともしなかった。

「今日はしないのか」
代わりに出てきた言葉は作業確認だった。
「民を護らずして、子作りに励むだけなんて、それでは私も『うむきかい』では無いですか」
フリージアはそんなエコーを軽蔑した。
「…そうか、違うのか」
それは、フリージアには侮蔑にしか聞こえなかった。
だから彼女はエコーを無視して窓から飛び降りて、警報が鳴る方へと向かっていった。

エルフ達は非常に高い魔力を持っている。他の種族と比べても飛び抜けており、魔法の扱いに長けている。
しかし、魔法によって生み出された存在は当然の如く魔力を孕んでいる。
そして魔力を孕んでいる物は魔力抵抗により同極の磁石のように、暴風の前の紙のように退けられる。
他の種族と交わると、己の種族を残せないエルフ。
他の種族と交わると己の種族を残させるオーク。
高い魔力を持ったエルフ。
高い魔力抵抗を持ったオーク。
オークがエルフを襲うのは理に適っており、エルフがオークに狙われるのは当然だった。

フリージアが警報が鳴った方面の集落に着いたとき、それはエルフにとっての地獄だった。
エルフの男は子供であっても殺されており、女は例外なくその場で犯される。
抵抗するエルフの騎士達は劣勢で、戦う意志は微塵も衰えずも、それでも各々が高すぎる敗北の可能性を理解していた。
「皆様、遅くなって済みません」
「隊長っ!? どうしてあなたが此処に…」

エルフの姫は、恒例として騎士団の長を兼任するが、それは形式的なものであって本来姫が戦場に出る事は無い。
本来なら異邦人との子作りに励むだけの存在が、危険地帯にやってきた事をエルフの騎士達は見直すと共に、
その貴重な存在が危険にさらされるこの状況を悔やんだ。

「私はこの国の騎士の長です。
例え名ばかりであろうと、私にはその責務があります」
そう言って、フリージアは槍を構えた。
この国の国宝でもある宝槍『審樹の枝』。
それは正義の女神を祀る神樹の枝を加工した、至高の槍。

フリージアは駆け出すと近くに居たオークにその槍を振り下ろした。
まるでチーズを割くように易々とオークを切り裂いた直後、オークは身の内から炎上した。
フリージアの得意な炎の魔法を付与した一撃が魔力抵抗の高いオークに成立したのだ。
「まだっ!! いけますっっ!!!! 火刑魔法(ブルーリ)!!」
更に横に脚を大きく開いて踏み込んだ姫騎士は、薙ぐように水平に一閃。
オーク二人を同時に切り裂いて同時に魔力を解放。
切り裂かれたオークは松明のように夜の空へ炎を上げた。
「火砕流魔法(フォンテンブルローント)!!」
フリージアは叫ぶと同時にその場で槍を頭上で振り回して地面に突き刺した。
すると、天高く舞い上がった炎が意志を持った蛇の様に鎌首を振り下ろしながら他のオークに襲いかかった。
他のエルフとは隔絶された力を持つ神器を持つフリージア。
しかし、莫大な魔力を過剰に消費する特性を持った審樹の枝により目に見えるほどにフリージアは消耗していた。

止まらない汗は火炎魔法の熱のせいだけでは無かった。
短期決戦を望むフリージア。しかし、彼女を嘲笑うように炎の蛇の蹂躙の中から表面が少し焦げた程度で歩いてくるオークが居た。
黒く毛深いオークだった。
「姫様に続けっ!!」
建前だけで無く、身を以て民を護る貴族の在り方を示した姫に続けとばかりに討ち漏らされたオーク、
即ち黒いオークへと騎士達は襲いかかった。
彼女たちの魔法はオークには通用しない。
だからこそ魔力を余り通さない魔法戦闘には不利な只の鋭利な槍を手に取ってエルフの騎士達は黒いオークへと襲いかかった。
しかし、その槍は黒いオークに突き刺さる事無く弾かれ、エルフ達の一人が逆に黒いオークに捕まった。
その巨体から生み出される握力に捕まったエルフだったが、その様子がおかしかった。
「迷うな、惑うな私ごところｓ［ｌｊｎ来ｂｌ止ｉ％&,）ｌ」
そこには先程まで居たエルフの戦士の面影は無く、
まるで、障者に精神を犯されたかのように壊れたエルフがそこには居た。
一体何なのか？　その疑問を持っている余裕は無かった。
新たなエルフが爆発的な突進をしてきた黒いオークに捕まって同じように気が狂った。
そして、黒いオークはフリージアの方を見た。
次の標的は決まったようだった。
フリージアは恐れを誤魔化すように槍で突貫したが、黒いオークの不自然に洗練された身のこなしによって、それはあたわざるものとなった。
逆に蹴り飛ばされたフリージア。審樹の枝が精神汚染を阻んだのか、接触した事による影響は無かったが、脚の感覚が無かった。
強く脚を蹴りつけられたせいで脚が真っ青に腫れていた。
それに気が付いた途端、激痛がフリージアを襲った。

「このようなところでっ…」
母の言うとおり、安全な場所で大人しく子作りをしていれば良かったとは思わない。
初めての母親への反逆をした事は言葉には出来ない感覚だったが、それでも国を、森を、国民を護る為ならこの痛みも、
この後オーク達によってもたらされる絶望であれ納得できた。…諦める事には慣れていた。
だが、それでもまだ出来るはずだ。まだ足掻ける事があるはずだ。
こんな所でオークに負けては被害の進行が予測も出来ない。
もっとやれるはずだ。きっと戦えるはずだ。
そう、心には闘志が未だ燃えている。
だというのに――――――彼女の脚はそれに答えてはくれない。
彼女の心に応えて立ち上がる事さえ許してくれはしない。
護りたい国民がいる。護りたい誇りがある。護りたい国家がある。
それなのに、それを叶える力が無い。
そんな彼女を嘲笑うように、黒いオークはゆっくりとその手をフリージアに伸ばし――――――一気にその場を飛び退いた。

エルフの民なら理解できる魔力のうねり。
形容しがたい速度で行われているそれが少女の前にあった。
己より僅かに高い背。風に靡く漆黒の髪。
後ろからは見えないがきっと今も透き通った瞳。
彼女の共同作業者がそこに居た。

莫大な魔力を生まれ持って保持しているエルフとは違い、
新しい人間は少ない魔力を効率的に使用するために魔力的に構築された体内のエンジンでピストン運動から生み出される魔力効果を実現させる。
エルフなら燃料をそのまま引火させる様に魔力をそのまま魔法に変えるが、人間は魔力を回転させて作用させるということをフリージ

アは識っている。
だが、それを知っていてもそれは異質な魔力の流れだった。
ピストン運動を行わず回転をそのまま力に変えている。
かつて追放されたエルフの研究者が提唱した全く新しい魔力運用の容がこのような物では無かっただろうかと少女には思い当たった。
そもそもエルフは魔力をそのまま魔法に変えられるだけの潤沢な魔力があるから、不要な研究だった。
第一、その研究の元となったのがオークの対魔力原因であるジャイロ効果を起こして内部回転する魔力というのが良くなかった。
結果として追放された研究者は人間の社会で消息を絶ったとされていた為、その研究成果も共に消えたはずだった。
技術的にトルクが圧倒的に不足するために、常に高速回転を維持しなければ効率を保てない上に燃費が悪い。
エルフには不要であり、エルフ並みの魔力が無ければ火を放ったり、雷を起こす魔法は使えない欠陥品だった。
それが、どういうわけか目の前の子供を産ませるしか価値のない『うませるきかい』の中で実現している。
「『うむきかい』がいないと『うませるきかい』も仕事にならない」
エコーの中を循環する魔力が更に回転数を上げた。
内部で魔力が回転するという意味ではエルフよりオークに近いが、オークから見ても異常な回転速度だった。
その速度実に９０００ｒｐｍ。
内部で魔力を回転させるオークでさえ、それをやれば中身の魔力が遠心力ではじけ飛んで絶命する。

そして、エコーは消えた。
少なくともフリージアの目にはそう映った。
そして、ほぼ同時に黒いオークの右肩口から血が噴き出した。
黒いオークは何かを悟ったように拳を構えると、左側に向かって一気に突き出した。
しかし、その腕の付け根、脇の下から再び大出血を晒す事となって

しまった。
見ればオークの腕の数メートル先くらいから弧を描くような地面の削り跡が残っていた。
黒いオークは少なくとも呆けている標的の女よりは余程敵を理解していた。
己達の種族と同じように、内部で魔力を高速回転させそれで肉弾戦を行っているのだ。
オーク達との違いは魔力の回転を魔法への防御では無く、身体強化に使っているという点。
極めて高い技術が使われている事は想像に難くない。似たような事をしてきたオークにも模倣は不可能に近いだろう。
だが、黒いオークもそれで諦めるわけには行かない。
己の種族を再生させ、人間の餌で無く一つの種族としての誇りを取り戻すためにも魂を闇に売り渡したのだ。
残存ずる唯一の王族でありながら、自身の子供を成せない身体になったとしても同胞を家畜では無い存在へと戻すと決めたのだから。
その為には呪われた存在への生け贄にエルフの王族を捧げる必要があった。
『障者』と同化したとしても、己の血筋を絶やしたとしても護らなければならない物があるのは黒いオークもまた同じだった。

例え無理だと解っていたとしても、やらなければならない事がある。
襲撃者がやっているように己の中の魔力を身体強化へと回す。
成功すれば元の自力が高いオークであるが故に、強化倍率が低くても人間に勝てる可能性はある。
黒いオークの毛穴から血がにじみ出る。上半身の細胞が壊死していく。
だが、それでもそうしなければならないのだと黒いオークは理解していた。
黒いオークは直感的に後ろに向けて全力で殴りつけた。

そこに強い手応えを感じた。
いや、その手応えは余りにも強すぎた。
右手は手首の先からはじけ飛び、衝撃波が右耳を穿った。
対して人間の男は黒いオークと同じ構えを取っており、その身体の中の魔力回転は収まっているものの無傷だった。
９０００回転を０に止めるという勢いをそのまま攻撃に転化したのだ。
しかし、再び９０００回転に戻すには時間がかかるだろう。少なくとも一瞬では戻らない。間違いなくそれは明確な隙だった。
しかし、黒いオークにはそれが解っていても勝てるビジョンが浮かばなかった。
右腕が使えないだけで無く、内臓が悲鳴すら上げられない状態になっていた。
目の前の人間が平然と行っている事を、模倣しただけで己の魔力が己の身体を攻撃していた。
最早ここまでと判断した黒いオークは気が狂ったエルフの女を一人掴むと元来た道へと走り去った。
エコーは追跡は危険だと判断してそれを見逃すと、フリージアの隣にやってきた。
そして目線を向ける事無く彼女へと声をかけた。
「女王様が心配しているよ『うむきかい』」
「私はっ、『うむきかい』などではありませんっ!!」
座り込んだエルフの姫は、助けに来た己の子作り相手に反論した。
「無礼だぞ人間っ!!」
エルフの騎士達もエコーへと強く抗議した。
一応とは言え、エルフの女王から形だけの王配としての権威を持たされているエコーにたかが騎士程度が逆らう事は許されない事は承知の上でである。
「一つの人格として認めてくれる者達が居るのなら『うむきかい』とは違うのかも知れないね」
一つの人格として認めてくれる者達が居ない『うませるきかい』は、

己の作業相手を羨ましいと思い、自分もそうなりたいと思い、

――――そしてそれを諦めた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　奔る悦び

少しだけエコーへの態度が軟化したフリージアは度重なる性行の果てに遂に懐妊した。
女王は歓喜極まり、次いで妊娠中のフリージアに種を付ける事も出来ないので、未婚のエルフ貴族の女性達に上の席次から順に孕ませるようにとエコーへと伝え、
エコーは反論する事無くそれに頷いた。
席次第２位のアンゼリカは最初は人間の男と交わる事にフリージア同様嫌悪感があったようだが、結果として行為に嵌まってしまったようだった。
とは言え、やたらとエコーに対して否定的な言葉が多いが、その言葉がマゾヒストな期待が込められたものだというのは解る人には解るだろう。
席次３位以降のエルフ達は己の序列が上がる事を想像してか、最初からエコーには好意的だった。少なくとも表面上はそう見せていた。
席次第１位のソレーユは貴族でありながら王家の血を濃く引く女性で、追放された研究者のエルフの妹であり、エコーの魔力運用に強い興味を持っていた。
姉が追放されるに値すると考えた事の成果であり、間違いなく姉とエコーが何らかの形で接触していると考えた事も大きかった。
とは言え、姉が追放された事例もあるので表立ってはその研究成果に興味がある振りはしなかったが、寝室で二人きりになると別だった。
しかし、エコーは質問に答える事も無く、無感動に無感情に無表情で無言で腰を動かすだけ。
ある意味シュールだが、もとよりエコーに情緒という物は無かった。
フリージアは自分と子を成した男が他の女とも節操なく交わっている事に、何処か嫌な気分にはなったが、それを口に出す権利も権力も彼女には無かった。

エコーは今日も種馬として女王のハイエルフの王国を作る計画の一端を担っている。
そんな日々だった。

ある日、エルフの王国に襲撃者が来た。
とは言え、障者でもオークでも無い。
それは竜(ドラゴン)だった。

灰色の巨竜はエルフの森に降り立つと人型の姿を取った。
「はろぉえぶりばでぃエルフ(森ガール)たち。『うませるきかい(フィーバッド)』で王族を懐妊させたのね。おめでとう。
じゃあ、次は竜族(わたし)が貰っていくわね。こっちも絶滅危惧種なの。エルフばかり純強化できるなんてズルいと思うわよね」
一方的に自由な事を言って来たのは嘗ての天空の覇者、竜族の女王、ムシュフシュ種のシャヴォンヌ。
原初の竜は嘗て神の一柱だった。
しかし、時代を経る度に様々な竜種に分岐し、そしてその度に劣化したとされている。
そして、天空に住んでいた竜の領域に、人間が航空機を開発して乗り込んできたときには、竜は天空の覇者の異名を人間に奪われる事となった。
シャヴォンヌはエルフの女王と同じく先祖還りを以て、神の領域に竜族を戻し、再び世界の覇権を狙っている。
そんな世界征服予告を竜の女王は誰に聞かれるでも無く勝手に話し始めた。
仮に犯行がばれても、エルフ如きなんて束になられても負けないという絶対的自信の表れでもあった。
神に至れば、障者によって劣化していく科学文明の人間にさえ勝てるという根拠の無い自身がシャヴォンヌにはあった。
その自身の根拠はシャヴォンヌ自身が保証する故に、シャヴォンヌにとってはそれが必要充分であった。

強大な竜の王に、他者に認めて貰わなければ保てない自身など不必要だった。

シャヴォンヌはズカズカとエコーの居る部屋に入っていった。
「あなたが再生産（フィードバック）ね。思ったより個体値高そうで歴代のフィードバックより期待値大きい感じね。
素敵よ。ねえ、どうかしら？　貧乳多めの森ガールよりもぐれーとでないすばでぇ（当社比）なドラゴンに飼われてみない？
森ガールと違って、豪快な空ガールは嘘をつかないわよ」
「…僕に決定権はありませんからお好きにどうぞ」

「ちょっろ～。ちょっとあっさり過ぎない？　ホラ、不眠症が治って久し振りに爆睡してたわたしの姉さんより物わかり良すぎよ。
ほら、なんて言うか立ち向かってやるぞって英雄君をペロリといくのが醍醐味な訳で、黙々と生け贄になる子を食べちゃうのは趣味じゃ無いって言うか。
何となくわかる？　あっ、わからなくてもいいけど」
ちょっとテンションが高すぎてついていけない気がするが、そもそもついていく必要も自分がどう感じるかも考える必要も無いと諦めるエコー。
世界征服終わったら返すから。とアレな事を告げたシャヴォンヌはエコーを掴むと竜の姿に戻って飛び去っていった。
エルフの女王は固まったまま動く事も出来ずにいた。
フリージアは後からそれを聞いて、竜が『うませるきかい』を浚った事よりも、彼が抵抗しなかった事に落胆した。

シャヴォンヌは雲の上にある古城に戻ると、人間の姿になった。
いきなり裸だった。
「手っ取り早い方が良いよね。やろっか」
ムードもへったくれも無かった。

「恥ずかしく無いんですか？」
決定権が無い自覚があるので、反対するつもりは全く無い『うませるきかい』であったが、取り敢えず聞いてみようと思った。
「いえーす。わたしの身体に恥ずかしいところなんて何一つ無いわ。顔、胸、背中、腰、尻、脚――――取り敢えずぱあふぇくとでしょ？」
何度も言うようにエコーには拒否権は無い。
故に、それでは始めましょうかと服を脱ぎ始めたが、そんな冷静にじゃなくてがっついてくると思っていたシャヴォンヌには不満だった。
「…なるほど、着衣が好みな訳ね」
乗り気でがっついてこない事を、そういう理由で竜の女王は納得した。
勿論、魅力的すぎる自分にがっつかない男がいるという発想は一切無い。
彼女が一瞬で装着した衣装は、深い紺色で肩の上で紐を通すようにして支え、身体にフィットして腰回りを覆い隠すも、手足などは一切隠さないものだった。
詰まるところのスクール水着である。そしてわがままずぎる肉体を持った彼女がそれを着ると凄まじい破壊力となる。
雪のような白い髪を靡かせながらポージングを取っているが、相手の少年はそれを気にする様子は無い。
「別に衣服は着ても着なくてもどちらでも良いですよ」
己は人格ある人間では無く、『うませるきかい』だから考える必要も無い。興奮する必要も無い。
肉体的に欲情した状態にあれば行為は成せる。
何ともシャヴォンヌには面白くない反応だった。
そして、シャヴォンヌが不満そうにしていると、流れ作業的にエコーは行為を始めようとした。
具体的には慣れた手つきでシャヴォンヌの身体を触り始めた。
「ちょっとまって、ほら、私も初めてだからさ、その何て言うかむぅど

とか、そういうの大事にして欲しいんだけど」
まさかの処女だった。
そして、自分から全裸になったりとかしておきながらムードが欲しいとか言い出す程度にはわがままで女の子だった。
因みに、シャヴォンヌ的には興奮しきってたまらずダイブしてきたエコーが一気に襲いかかるのはムードとしてはアリだったらしい。
…ムードとは何なのか、それを万全に理解できればきっとモテる男になるに違いない。

大事な事には拘らないくせに、違う事には拘る、割と面倒な傍若無人唯我独尊な空ガールのシャヴォンヌ。
朝昼晩とワインのテイスティングとチェスと温泉巡りと子作りを繰り返し、時に全部同時に要求する彼女だったが、エコーは黙々とその要求に応えていた。
時にはドラゴンスレイヤーとして名をあげようとする英雄がやってきては、エコーの目の前でガッツリとシャヴォンヌに喰われる事もあったが、エコーは気にしなかった。
口周りに鮮血が着いていたとしても、要求されればそのまま行為を行う程度には彼は『うませるきかい』だった。

ある日、シャヴォンヌが懐妊した。
竜にとって、懐妊したときは非常に弱点となる。
己より弱くなる種族を分化して生むときは、負担も少ない上に多く産める。
代わりに、己より上位の竜を生むとなれば、膨大な体力を消費し続ける事となる上に、子供の数も少なくなる。
これが、竜族が劣化を続けてきた最大の原因である。

生まれてくるのが神に匹敵する古代竜であれば、シャヴォンヌはそれ相応の負担を負う事になる。
彼女は生まれてくる我が子のために、母体の生存に必要なリソース

だけを残して生命力を割いている。
今のシャヴォンヌは、人間の女性よりも脆い。

その期を狙っていたのだろうか？
一匹の黒い竜がシャヴォンヌの居城にやってきた。
黒い竜は客として訪問してきたわけでは無い。
近くまで寄ってきた途端、城に向けて口から火炎の塊を吐き出した。
普段はシャヴォンヌの水と氷の魔力でコーティングされている城だが、今はそのコーティングの力も発揮されていない。
その力さえも、胎の中の仔に持って行かれているのだ。
だが、シャヴォンヌは一時的に仔への供給を減らしてまで対抗をしようとは考えなかった。
貴き竜の女性とはそういうものなのだ。
仔を力無い竜として生むくらいなら、仔もろとも胎に宿したまま死ぬ事を選ぶ。
少なくともシャヴォンヌはそう考えていた。

そんなシャヴォンヌと同じ部屋に居たエコーはその部屋から出て行こうとしていた。
「黒くなった叔父さんの狙いは私と仔だろうから、今逃げればあなたは無事に逃げられると思う。
ありがとうね、この仔を宿せただけで私にははっぴぃだったから」
シャヴォンヌはいつものように自信ありげに堂々とそう言った。
だからきっと、この時のシャヴォンヌはエコーの行動を勘違いしていたに違いなかった。
「…生ませるまでが道具の役目だから」
悪趣味な事にシャヴォンヌは飾っていた歴代の竜に喰われた英雄の剣を飾っている。
彼女曰くこれは挑戦者への敬意と竜の習性らしい。
その内の最近コレクションに加わったものをエコーは引き抜くと、

部屋から出て行った。
そして、焼け焦げた城へとやってきた黒い竜は出てきたエコーを見て、見逃してやるとばかりに嗤った。
だが。直後に空に居る己に剣を向けてきたエコーに、竜としての闘争本能が目醒めさせられた。
己に喰われる英雄に相応しい構えだと黒き竜は興奮した。
自分を差し置いて玉座に着いた姪を抹殺し、王に返り咲く事など、今この時はどうでも良い。
姪が神竜を生んで世界征服を行う前に、竜族を己が支配する計画などどうでも良い。
姪に勝つために障者に魂を譲り渡した事などどうでも良い。
そんなこと己に立ち向かう英雄と対峙するのは何物にも代えがたい竜の本能なのだから。
――黒き竜は闇色に染まったブレスを吐いた。

これで終わったか。これで終わってくれるなよ。
相反する感情が黒い竜の中で同居する。
そして、その答えは己の翼に奔る激痛が教えてくれた。
英雄が己の背に乗り剣を突き刺していたのだ。
それでこそ、これでこそ。
黒い竜は痛みでは無い歓喜を以て咆哮した。

エコーの戦闘手段は己の中の魔力を高速循環させる事で発生する圧力を絶え間なく被せ続ける事による身体強化だった。
通常、空中に居る相手への攻撃手段など無い。
少なくともエコーに戦闘技術を教えたものはその先を想定してなど居なかった。
エコーは間違いなく天才だった。人々の中で過ごし研究者や教官として生きれば人類の未来はもう少し明るかったかも知れない。
通常、人間は油に火を付けるようにして魔力を起爆させてエネル

ギーをエンジンに引き起こす。
だが、エコーは違う。
魔力を急速に圧縮する事で火を使わずに点火する様に起動させる。
これだけで凄まじい効率化を生み出せるが、これさえも目的では無く手段に過ぎない。
複雑すぎる術式を体内で高速で回した彼は、自らの肉体の表面に空気との親和性を生み出すフィルターを作り出す。
これにより、座標に固定されるが如く空中機動（スカイアクティブ）が可能となる。
まるで神の使いの天使のように空を舞い、まるで悪魔のように急所を狙い、人間のように命を燃やし、機械のように淡々としている。
永く生きる黒い竜をして、これ程の逸材は見た事は無かった。
戦う相手ではなく、交尾する相手としてしかこの男と関われない姪が哀れなほどだった。

来い、英雄ッッ!!!!

最早言葉にならない咆哮を上げて、黒い竜は真下に居る目標に向けて、最大威力の黒炎を放った。
エコーには正面から迎え撃つ必要など無かった。
だが、ブレスが急に肥大化して膨れ上がった。
これでは急に横にそれても逃げられないし、反転すれば勢いが低下してそれに合わせて魔力の回転数が落ちてしまう。
空中で魔力の回転数が落ちれば、空に居る事も保てなくなる。
ジェット機は止まったまま空中には居られないのと同じ理屈だった。
故に、迎え撃つ。

回転数をレッドゾーンまで跳ね上げる。１１０００ｒｐｍまできっちり回す。
瞬間、エコーの世界が切り替わった。
早すぎる者だけの世界にエコーが順応した結果がそこにあった。

何も書き込まれていない方眼用紙のような無の領域。
そしてその先に光(ゴール)があった。
それはきっと黒い竜だった。
剣をしっかり構え、それでいて獣のように駆け出したエコーはその光に剣を突き刺した。

黒い竜は人間では竜には敵わないと知っていた。
精々人間など魚に毛が生えた程度の生命体だと。
黒い竜は見た。
滝を昇るが如く翔け昇ってきた英雄の姿を。

「見事…」

黒い竜は、かつて様々な先達がそうあったように、自分を殺す者(自分だけの英雄)を見付けられた。
それは、王になる事より、世界を支配する事よりも尊い事だった。

その様子を離れた場所からシャヴォンヌは見ていた。
身体が疼いた。心が疼いた。そして魂が疼いた。
己の仔の父親に相応しい。そして孰れは本気で殺し合いたい(愛し合いたい)ものだと。

その熱意が感染したのか、胎の中の仔が一気に熱を帯びた。
その経験が初めてのシャヴォンヌはそれ相応にも解る。出産の時だった。
竜を殺し終えた父親(エコー)がやってきたときに神にも等しい竜の仔は生まれた。

そして――――この世界から消え去った。

「どうして…いや、そうか。流石私の子供すけぇるが違うのね」
嘗ての神話の時代ならともかく、生命体の数も増え、世界の質も消費された今では最早神が存在する許容領域は無い。
だからこの世界に神は居ないのだ。
故に、生まれ持って神となった幼き竜はこの世に生まれ落ちたと同時に、神の領域へと移った。
母親をこの世界に残したまま。

「ひとり立ち早すぎないかな。もう、本当に母親泣かせね。私は最強だから泣かないけど」

その言葉を裏切るように、胸を貸したエコーの服は湿っていたが、どうせ、『うませるきかい』には気の利いた事は出来ない自覚があったので、
彼は彼女が泣き止むまで、いつものように無言で立ち尽くして居た。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　やさしいせかいののぞきかた

エルフ族からの再三のエコーの返還要求にシャヴォンヌは応える事にした。

それには己の仔が文字通りの意味で天に還った事のショックも多分に影響していたのだろう。

『うませるきかい』にとって所有者が代わろうと道具に意志決定権は無いので問題があるかどうかを感じる必要は無かった。

ただ、黒い竜の一件以降は良好な関係は築けていたような気がしなくも無かったが、それすらも『うませるきかい』にとっては判断する必要の無い事だった。

シャヴォンヌはエコーと別れる間際、矢鱈と天の世界に還った仔の事ばかりを話していた。

それはエルフの迎えが来たときも同じだった。

いつか己が仔の居る場所へ到達すると平然と話す以前より落ち着いたように見えるシャヴォンヌは、事情を知らぬエルフからすれば同情を誘った。

エコーはエルフの勘違いに気が付いたが、特に訂正する必要は感じなかった。

６Ｖメタモ〇であるエコー。

６Ｖ。それは全ての個体値がその種族における最高値である事を示している。

つまり、当代最高の英雄、大英雄になり得る素質を示していた。

無論、固有特性などの要素は存在するし、スキルなどの問題もある。

某ゲームで言えば、ステータスは高いのに技や特性が悪いというようなものだ。

だが、６Ｖである。

体力・攻撃力・防御力・素早さ・魔法攻撃・魔法防御全[6]てに優れた[V]存在。

しかし、それ以上に彼は『うませるきかい』である要素が余りに大きかった。
『うませるきかい』でさえ無ければ、人間社会最強の英雄組織『円卓騎士団』に入る可能性すら十分にあった。
しかし、彼は『うませるきかい』であった。どうしようも無いくらいにそれが求められてしまった。
学者として生きる道を選べば、障者の正体を発見したかも知れない。
戦士として生きれば、円卓騎士団の一員になったかも知れない。
教官として生きれば、新たな魔力運用仮想器官『ヴァンケル式』が世に広まったかも知れない。
だが、それはいずれもＩＦの話だ。
そうする以上に『うませるきかい』の役割が大きいと彼の周囲が判断したからこそそう育てられた。
唯一、彼に『うませるきかい』以外に６Ｖ保持の素質を持つ者として戦闘技術を叩き込んだエルフの研究者の女性がいたが、それも過去の話だ。

エルフの王国に帰って、ひたすら子作りを再開する事になったエコー。
作業以外の何物でも無い行為に、彼が感じる物は無いし、感じる必要を認識しても居ない。
今日も無感動に無感情に美女達と夜を共にするのだ。
ある晩、エコーはエルフの森の最深部に呼び出された。
本来なら常に子作りに専念する必要があるのだが、この時は例外だった。
徐々に母から権力を継承しつつあるフリージアがエコーを呼び出したのだ。
あのオークの一件以降、以前より『うむきかい』であったフリージアは己の意志を持つようになった。

それには『うませるきかい』の子を孕んだ事による権力の増加も大きかったし、
妊娠した直後、自分にはどうにもならないところで子供の父親を勝手に奪われた事、そして取り返す事が出来なかった事も関係していた。

エコーがフリージアの元に着いたとき、審判の樹の下で彼女は丁度出産を始める直前だった。
要するに父親として子供が生まれる瞬間に立ち会えというのがフリージアの要望だった。
「妻と子を放って随分と長い出張でしたね。…いえ、あなたがその様な事を意識もしていない事は私も理解していますので気にしないで下さい。
ですが、少しの間手を握って下さいますか…？」
フリージアの言うとおり、エコーにとってはフリージアを妊娠させた事も、子供が生まれてくる事も作業以外の何物でも無かった。
だが、それを敢えて言う必要も無く、黙って手を握った。

フリージアの手から暖かみのある魔力がエコーに伝わってくる。
そしてそれは二種類の温度を持っていた。一つはフリージアのもので、もう一つは新たな命のものだろう。
何故そうしたかは彼自身にも解らないが、エコーはフリージアの手から伝わる魔力をゆりかごであやすように自身の流転する魔力を流し返した。

それから暫くして子供は生まれた。
フリージアにと言うよりは、エルフの女王に似た子供だった。
黄金のような髪、透き通る肌、幼くも冷然とした佇まいと、それを感じさせる瞳。
「…ハイエルフか」
「ええ。ハイエルフね。良くやりました。流石はわたしの娘。

本当に良くやりました」
「…お母様、もし、ハイエルフで無かったとしても私にとっては大切な娘です。
お母様にとっても大切な孫では無いのですか？」
エコーにも母親にも、フリージアの子供としてで無く『ハイエルフ』として認識される我が子がフリージアには不憫だった。
己や子供の父親がそうなってしまったようには、この子は染めたくは無い。
彼女は母親としてそう思った。
「フリージア、それを考える必要はありません。
あなたの子供は実際にハイエルフなのですから」
エルフの女王は口に出しては言わないが、もしハイエルフで無かったときにはきっと落胆していた事は言うまでも無い事だった。
フリージアは、やはりもしもの時のために、少しずつでも権力を掌握し始めていた事は間違ってないと心の中で呟いた。
自分は未だ『うむきかい』からエルフに戻ってこれた。
だが、『うませるきかい』から人間に戻れても居ない男のような例もある。
例え、そう、例えだが恩義ある母を追放する事になったとしても、『ハイエルフ』ではなく『フリージアの娘』として育てたいと、
小さく、しかし確かに彼女は決意した。
「…そうですね。この子は、ハーベルティアはハイエルフです。
ですが、それ以上に私の娘です」
生まれ持っていつかの王座が確約された黄金の娘。
幼い命はこの世に生まれた産声を叫ぶ事無く、己の母の顔に手を伸ばした。
そもそも、おなかを蹴る事すらほぼ無かった物わかりが良すぎる娘に、フリージアはもう少しわがままになっても良いのだと告げた。
それが伝わったのか、赤子は途端に火が付いたように泣き始めた。
エルフの女王はそれを見てその場から去った。

エコーもそれから暫くフリージアとハーベルティアを見ていた後その場から去って行った。
エコーは何故か女王の後を付けた。
女王はそれに気が付いてはいたが、意志の無い『うませるきかい』に見られたところで何も変わらないときにしなかった。
だが、流石に女王の私室にまではエコーは入る事は出来なかった。
厳重な封印で守られた場所にまでは入る事は出来なかった。

だが、狂気が封印の向こうに居る事は理解できた。
本人以外には誰も知らない事、厳密に言えば娘の容姿を見てフリージアは気がつき始めているが、
エルフの女王はハーベルティアを除けば唯一のハイエルフであり、戦乱の生き残りである。
これはエルフの女王以外には知られていない事だった。
エルフの女王にとって、孫が生まれた事よりも『同族』が生まれた事の方が意味合いが強い。
嘗て散っていった姉達や親友達が再び再生されるような気さえしていた。
根拠も冷静さも現実的で無いハイエルフ量産計画の目的はそこにあった。
エルフは絶滅が危惧される程度の個体数が存在するが、ハイエルフは己しか存在しないという孤独。
それが解消されたのだ。
娘よりも遙かに己と血が繋がっているかのように感じられた。
強い負担をかける代わりに、成長値効率をあげる強制ギプスのような呪印…いや、呪因を誰にも気が付かれずに仕込む事にも成功した。
「待ってて下さいお姉様方…。あなた方はわたしの娘が必ずや生み直させて差し上げます。
そして、次こそは、次こそはあの猿達を駆逐しましょう」

その慈愛に満ちた表情の下には数百年の狂気が眠っていた。

女王の希望した名前『イリス』ではなく『ハーベルティア』と名付けられた子は、両親から高い個体値を引き継ぎ、
ハイエルフとしての種族値まで手に入れていた。
今後、彼女がどう育つとしても何らかの方向性に偉大となることは避けられない。
ハーベルティアの母は、偉大にならなくても幸せに過ごしてくれれば良いと考えるだろう。
しかし、高すぎる能力を約束された子供だからこそ、周囲の与えようとする期待（レール）が固くなってしまうのは仕方ない事だった。
その意味ではエコーが『うませるきかい』として育った事には期待が込められたという側面もあろう。
ただ、それ以上に人間にとってはそれ以外の人型生命体『亜人』を強化する存在である『うませるきかい』が忌み子であった事も大きかったが。

エルフの所に、以前ドラゴンが襲撃に来たが、エルフやドラゴン以外にも『うませるきかい』を求める種族は多い。
例えば女性の比率が高い種族や、個体能力は高いが出生率が低い種族、古代では強力だったが劣化した種族などでその需要が大きかった、
そういう意味では、エルフやドラゴンなどにはまさにうってつけの存在であった。
ただ、女性の比率が極端に高くも無く、繁殖力も高く、古代においてもそこまで強くなかった種族が６Ｖ個体値を血族に欲しがらないわけでは無い。
伝説では『うませるきかい』は本来の同族にはただの種無しの如く無意味だとされているが、男子を持たない人間の貴族は藁をも掴みたいのは仕方ない。
子供が女性しかいない人間の貴族や、人間の次に数の多い獣人種で

あれ、血族に６Ｖを求める声はある。
しかし、需要や供給の問題や、発言力の関係でエコーは今、エルフの所有物になっている。
だが、それでも６Ｖの種を貸せという種族はエルフの所にやってくるのだ。
先ほど挙げた獣人などはその筆頭だ。
獣人とは様々な獣の特徴を持つ人型の総称ではあるが、全体的に言える事は、よく言えば野性的、悪く言えば自分勝手な種族である。
己の利益になる事なら浅ましくても気にする事無く相手に要求するし、己の利益にならない事には余り興味が無い。
自分がどうしたいかに正直な民族故に、商売人には非常に向いていた。
しかし、その浅ましく品の無い様子が嫌われた事で、人間が行ったマイナスイメージ付与戦略が非常に大きく成功した結果、
金銭的な契約にはそれなりにしっかりしていた獣人の信用を破壊。
他の民族から軽蔑されて、資源や資産の流入が獣人内のネットワーク以外からは行われにくくなり、
個体数は緩やかに増加するまま、経済的には疲弊していっていた。
自業自得とも言えなくも無いが、人間の高潔で高度な信用を要する経済ネットワークの中心から外していく戦略は、その実かなりエグいものであった事を明記しておく。
クレジットカード社会で、クレジットカード発行条件信用記録確認組織のブラックリストに獣人が丸ごと放り投げられるようなものという一部の施策だけでも冷酷だと言えよう。
野人は野に帰せと、嘗ては経済発展していた帝国さえあった獣人社会が、人間と比べれば野性的な生活を現在しているのはそういう理由である。
エルフも人間からは性奴隷や技術奴隷として獣人同様に見下されているが、だからこそ獣人よりはマシだと思いたいエルフは獣人を見下している。
だが、自分勝手で浅ましいと思われるならそれでも良いと開き直っ

た獣人達はある意味しぶとかった。
しぶとく『うませるきかい』の二次借り受けを迫った。
彼らに物を貸したら返ってこないという認識を持つ者には、譲渡という形の強請り集りに思えただろう。
発情期という期間が設定されている、言い換えれば欲求しない期間もまた決まっているものの、
人間に畜生腹と馬鹿にされる程度には繁殖力の高い獣人には、種族の底上げが狙える。
種族値はドラゴンに大きく劣ろうとも、繁殖率は圧倒的にドラゴンに勝てるという数の理論だった。

獣人の使者達は、当初『うませるきかい』の自由意志を尊重すべきだと主張。
その後、『うませるきかい』に接触して自分達の社会に来れば良い待遇を与えると誘惑。
しかし伊達にうませる『きかい』では無かった。己の自由意志に価値を感じないエコーに獣人は戦略を変える事にした。
先ほどまで、『うませるきかい』の人権を主張していたにもかかわらず、今度は金銭でエルフからエコーを買い取ろうとした。
嘗てのような石油王の如く潤沢な財産があるわけでは無い。
しかし、それでもエルフよりは経済的には強かった獣人からの要求を呑まざるを得ない程度には大金が積まれていた。
結果、様々な規約・契約・呪約を『うませるきかい』や主たる獣人の上流階級にかけることで、『うませるきかい』は一時譲渡された。
その規約・契約・呪約が無ければ返す気が獣人側には無かった事を含めると、政治的にはエルフの女王の方が上手だった。
我々が信用できねえってのかと獣人側が凄んで見せても、単体で使者全員を葬れる戦力である女王には脅しなど、弱い犬の威嚇以外の効果は無かったからだ。

かくして、『うませるきかい』は獣人の国へと向かう事になった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　あにまる☆レース場最速理論

『物』として借り受けられたエコーの待遇は、控えめに言って当初告げられた待遇とは随分と違っていた。
発情期が来た者から順にやってきては去って行く。その様子は、戦争で野蛮な兵士に輪姦される占拠された村の女性達に近いものがあった。
違いは男女の逆と、孕まされる側の女性が生まれる子供に期待をかけている事だ。何せ、混血児どころか高個体値の純血種の先祖還りが生まれるからだ。
とは言え、エコーにはどうでも良い事だった。
やる事はどうせ変わらない。扱い方が変わる程度であるし、それに対して不満を言う気概も権利も彼には無いかのだから。

ある時、各種の獣人の上級族長会議の中で、下位層での試験は終わり、上位層家庭の娘達を『うませるきかい』で妊娠させる段階に来たという議題になった。
最大派閥猫系の現在の族長代表であるチーター種の族長に追随してきた姉妹が、自分で見初めた雄ではない『うませるきかい』の子を生む事に抵抗を示すという話だった。
上級族長会議で話すには、かなり個人的な要件だったが、もとより親馬鹿で通っている彼を知るものには平常運転だった。
「…チーター種では、駆け足が男の魅力なのだろう？
その男が足が速いなら大会に参加させてみてはどうだ」
気は優しいけれど力持ち。森で出会った人間のお嬢さんと結婚した紳士で寡黙な熊種の族長が口を開いた。
女性が落としたイヤリングを届けようとしたが、厳つい顔とでかい図体で勝手に恐れられて逃げられたという馴れ初めを持つ彼は、
妻の当時の年齢からロリコン呼ばわりを受けた事もある。
妻の方からアプローチしてきたという事実はあるが、自分よりかなり若い女性を愛している自覚はあるので、

妻を愛する事実を認めるからこそ、怒る事も腹を立てる事も無い獣人族きっての人格者である。
特技は社交ダンスである事は完全に余談だから、此処では触れない。
「モリク、お前が発言するとは珍しい。
だが、忘れていないか？　人間が我々と速さを競っても勝負にすらならないだろう？
あの蟲族ならともかく、我々に速度で敵う者などいない」
それは自負だった。
僅か7秒しないうちに最高速に移り、俊足で敵を仕留める彼らの誇りだ。
伊達に幼少時、俊足のタクやんと渾名を持った訳では無いチーター種の族長は答えた。
それまで獣人には珍しい文官派だったチーター族を一気に武を重視する獣人社会で頂上にのし上げた威圧感は伊達では無い。
空気が響くようであった。
「お前達の族を軽んじるつもりは無い。だが、エルフは言っていたぞ。奴は速いと」
そう言ったきり、熊族長マプウ・モリクは黙ったが、下品な族長達が「それは早漏という意味だ」と笑い初めてからは、
マプウ・モリクは酒がある席で誤解を招きやすい言い方で評価した事を少し後悔した。
だが、唯一厳しい目をしていた者が居た。
速さには絶対の誇りを持つ、最大派閥の族長だ。
「聞き捨てならんな。我らを差し置いて速いだと？
――良かろう。第13回あにまる☆レースを開催する。
商品は最近発掘した小規模な銀山だ。各人は挙って参加されたい」
その後はどの種族が勝つかという賭け事の話や、オッズや胴元の資金の調整の話などで夜が更けていった。
そして、第13回あにまる☆レース当日。

走って勝った物が強い。そんな獣人達を集め、競わせるレース『あにまる☆レース』

誰が一番速いの？第一回ホッポリョートーカップから丁度１０年。

今年、獣人族一を目指して沢山の人がタケシィマシティを目指す

そこに、チーター種の予選レースを勝ち抜いた姉妹が居た。

「父にはこの大会であの雄を下せば、婚姻を結ばなくて良い許可を得た。

喜べアサヒ、己より遅い雄の胤など宿さなくて済むぞ」

「はい、アオイ姉様。遅い雄なんて屑オブ屑ですよね」

彼女たちはチーター種族長の愛娘達である。

周囲の獣臭い獣人達とは一線を画する、垢抜けた育ちの良さと爽やかな香りを放っている。

姉妹は腰の帯を外すと、敵対する蟲人からモリクが頭を下げて手に入れたという、高級な生地で作られた身体を包む大きな一枚布の衣服を脱ぎ捨てた。

その下にあったのは、セパレートの陸上競技服に包まれた引き締まった無駄な肉の無い生唾ゴックンボディ。

…いや、妹の方は無駄じゃ無い肉の方も色々足りない感じだが、未だ成長期があるからチャンスが無いわけでもないし、

仮にチャンスがやってこなくてもそれはそれで需要はあった。

あにまる☆レースのルールは簡単。相手を直接妨害する事無く様々な特色あるコースを走り抜けると言うだけ。

物理的な妨害が駄目と言うだけで、天変地異を起こそうが、少し飛んでいようが、悪臭や耳障りな金切り声を出そうが、挑発やプレッシャーをかけようが自由だ。

但し、ワープなどをした場合は流石に若干ズルいと思われる可能性がある。

ルールは大体そんなところだ。

全選手が位置について、爆竹音が鳴ったと同時に駆け出した。

スピードが高いが、スタミナが無い者。登り坂などでガッツが足り

ない者など様々な者が居るが、一位になれるのはただ一人。
最初は草むらが広がるフィールドだった。
余りに高い草木が進行方向を惑わせると共に、足に引っかかるコースだった。
そしてそれを抜ければ硬い岩場が選手達を待っていた。
その後は登り坂に設置されたハードルを何度も飛び越えて、そのまま長い水場をトライアスロンよろしく泳ぎ抜けなければならない。
更に急な下り坂の平均台が待っており、濡れた足で走るにはかなり危険である。
その後は、岩肌の七連続ダウンヒルと呼べるかどうかも怪しい崖があった後、
最後だけはしっかりと切りそろえられた芝生のコースが用意されている。
そして、最大の特徴は、予算の関係もあるが、ゴールに向かうにつれてどんどんコースが狭くなっていく仕様であり、
最初は百名が同時に横に並ぶ事の出来る広さで始まるが、一番最後の一直線の芝生では、かろうじて二人程度が抜き合う程度の広さしか無く、
万が一巨大な体格の者が最初にこのコースに入ると勝負が決まってしまう仕組みだ。
とは言え、今大会の最有力候補と言われたアオイとアサヒはどちらも細身なので、最後まで勝負は解らない。
下馬評ではそう言われていた。

だが、蓋を開けてみれば如何だろうか、優勝所か、入賞すら期待されていなかった晒し者としての特別参加枠の人間が涼しい顔でトップ集団にいた。
アオイ達の姉妹も前半では余力を残しては居るものの、噂の『うませるきかい』はそれ以上に余裕があった。
元々短距離が得意な種族でありながら、長いコースを走るために血を吐くような努力をしてきたアオイにはそれは受け入れられるもの

では無かった。
魔力による身体強化で、加速は良い代わりに燃費が悪い仕様のエコーは、長いコース故に最初から全力は出しては居なかったが、
それでも伊達に６Ｖという大英雄になり得る素質を持つわけでは無い。
種族差の圧倒的な速度の違いを個体性能だけで追随させてきていた。
更に、後天的な無感動・無感情資質による無表情が端から見れば余裕を必要以上に醸し出していた。
「負けられるものかっ!!」
「…姉様ッ!?」

「おおーっと、アオイ・セイイ選手、草むらを抜けたばかりの序盤でイキナリの加速だぁっっ!!
果たしてこれで最後まで持つのかっ!?」
実況のフクロウの獣人が眠たそうな目を見開いて様子を報道する。
フクロウの獣人の男性は、夜のニュースのスポーツ部門のキャスターであり、普段この時間は寝ている為、キツそうだ。
…完全な人選ミスと言えよう。

アオイのリードは、草むらを抜けた直後から広がっていっているが、それを後続の人間は意識した様子は無い。
妹であり、ライバルであるアサヒは己のペースを崩す事無く走っているが、それは何度もレースの慣れがあってこそだ。
初心者の人間がそれ程冷静であれるのは、余程地力に余裕があるか、…そもそもこのレースにそれ程の価値を感じていないかだとアオイは認識した。
そう、それは許されない。己の人生を賭けて挑む闘いに手を抜こうなど許されて良いはずが無い。
灼熱の太陽が容赦なく日焼け止めの上からでさえ身を焼こうが、その二つ次は水泳だ。

アオイは体温の危険な上昇を無視し、岩場を駆け抜けた。
そして、一切の無駄の無い最低限の高さ、それでいてハードルにはギリギリで絶対に触れない高さで跳躍しながら最速理論に忠実に超えていく。
ハードルに引っかかった回数により、水泳に移る手前で休憩という名前のペナルティが発生するからだ。
体力配分の上手い選手などは、敢えて倒すハードルを選定して休憩を取る方法も考えるが、ノーミス、ノーストップが信条のアオイにはそれは受け入れられない。
一つもハードルに引っかかる事無く、休憩時間０の設定通り、走り抜ける勢いのまま水の中に飛び込む。
しかし、引き離したと思っていた人間の選手を解説する声が聞こえてきた。
「おおっと、特別参加枠のエコー選手。まさかの水上走りだーっ!?
このわたし、まさか今回のレースでこのような層は手段を見るとは思いませんでしたっ!!
着実にアオイ選手との距離を縮めてきております。これは速い。速すぎるっ!!」
ふざけるなふざけるなふざけるな――――!!
アオイの中の激情が解説の声を弾き捨てるようにして燃え上がる。
己は走る事だけに人生を費やしてきた。
『はしるきかい』と呼ばれてもそれは光栄に感じられるくらいには没頭してきた。
だというのに、『うませるきかい』として生きてきた男に走りで負けるなんて、受け入れられるはずが無い。
アオイは息継ぎの回数を半分にする事で、タイムロスを削る事にした。
無茶無理無謀など、知った事かとクールな美貌とは裏腹に熱しやすい彼女は吠えた。
「アオイ選手、更に加速したーっ!!

インカレの女王の名は伊達では無いーっ!!」
五月蠅い黙れ、聞こえるのは己の鼓動だけで良いとばかりに、アオイは己を痛めつけるように加速した。

漸く、比較的苦手な水泳を終えて、平均台に突入。
朦朧とする意識を無理矢理鎮めて、1cm単位でズレの無い姿勢で平均台の上の直線を駆け抜けていく。
後ろの人間との距離は再び回復してきた。
後は、何度も経験のある七ツ谷のダウンヒルだ。
上等ッ!! コーナー2つも抜ける前には私の背後から奴の気配を消してやる。
アオイはこれまでに無い高揚感と疲労感とを感じながらそう誓った。

一切の無駄の無い重心移動を利用して、坂を下り降りて行くアオイ。
しかし、足の裏に最小限の範囲で魔力のフィルターをかける事で、地面の抵抗を限りなく操作できるエコーはまるで悪魔のように、アオイの得意フィールドで攻めてきた。
生物には実現不可能な機械のための理論上最速で容赦なく生身のアオイを追い詰めていく。
「ダウンヒルの覇者、アオイ・セイイ選手にまさかの追随。
まさに番狂わせっ!! 最後の最後まで勝負は解りませんっ!!」
実況の声が響く。
一番得意なはずのフィールドで、追いつかれるという屈辱が過熱するが、それ以上に今まで感じた事の無い何かがアオイの中で目覚めていた。
当初は最初から爆上げしていたアオイが潰れるとの予想もあったが、それも無く、
『うませるきかい』として購入された人間も、それに負ける様子も無かった。

この勝負はエコーとアオイの一騎打ち。
誰もがそう思っていた。
だが、それを赦さない者が居た。
「何と言う事でしょうっ!?
昼でも起きてて良かったぁ!!
アサヒ・セイイ選手、まさかの連続カーブを直線で突き抜けているっ!!
コースガン無視、掟破りの地元走りだっ!?
こんなショートカットはアリなのかっ!?
如何なんですか、解説のシマダさんっ」
アサヒは通常でさえ急な連続カーブの下り坂で、コースを無視するように危険なほどの急斜を駆け下りていく。
その上、ブレーキをかける様子は無い。
「ええ、解説のシマダですっっ。
結論から言うとルール上は問題はありませんっっ。
実際に第7回あにまる☆レースで彼女の父親が実行していましたっっ。
あの時はっっ、此処までの斜面でもカーブでも無くっっ、アウトインアウトの極端な例という程度でしたがっっ、
やはりあの父の娘という事でしょうっっ。私もこのような走り方には驚きと興奮を禁じ得ませんっっ!!!!」
シマウマの獣人がマイクにハウリングを起こしながら叫んでいる。
しかし、観客からのクレームは出てこない。
三者三様の呑み込むような走りが観客を魅了していた。

「此処からだよ、姉様」
最後のカーブ、そこで地面を滑るようなコーナリングでアオイにエコーが追いついた瞬間、側面から飛び降りるようにアサヒが飛び込んできた。
体力を温存してきたアサヒには、アオイに対して勝ち目があった。
公式大会ではこれまで一度も勝った事が無い姉に、今度こそ勝て

る。
そんな希望が彼女の足下を掬った。
踏み込んだ地面が崩れて姿勢が倒れる。
このままだと、姿勢を直す前に正面から地面に激突する。
災厄の箱の最後に残った希望が、絶望の未来を手招いていた。
走りに全力を向け続けた故に意識が半ば薄れたアオイの目の前でゆっくりと地面に呑み込まれるように墜ちていく。

そんな彼女の視界に溝に足をかけて蹴り出すように滑り込む黒い影があった。
全てが遅く視えたアオイの視界の中で尚、影としか認識できない超々高速移動。
その影はアサヒが地面にぶつかる寸前で受け止めた。
そして彼女を地面に下ろすと、再び正面を向いた。
それは、アオイの方を見たままゴールを指さした。
立ち止まったアオイにゴールに辿り着くまではレースを続行するように示していた。
「そんな事、言われるまでも無い」

最後の直線。
一度立ち止まって速度が0になった二人の加速度が勝負を決める。
それはアオイも理解していた。
故に、己のスタミナでは考えられる限界を超えた二度目の最大速度領域へ踏み込んだ。
心臓も肺も思うように動かない。視界もあやふやで音も聞こえてこない。
だが、それが如何したとアオイは意志の力だけで駆け抜けた。

そして――――――

「なんと言う事でしょう、なんと言う事でしょう。

コンマ五桁に至るまで完全に同着ゴール。
優勝者は、アオイ選手・エコー選手だぁぁっっ!!」
実況の雄叫びを聞きながらアオイは意識を手放した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　Ｌｅｔ　ｉｔ　ｂｅ

セイイ家は先代当主までが文官だった超大金持ちの名家である。
現在の当主の妻も超一流のヴァイオリニストで神器と呼ばれる楽器を保持している。
アオイとアサヒの母である女性コノエは若き日、新進気鋭のヴァイオリニストとして名をはせていた頃、
武とはかけ離れた実家に嫌気がさした当時の次期当主、現在の族長に埃が被るよりは良いと神器と呼ばれるヴァイオリンを貸し与えられた。
返納期限は彼の一族に娘が生まれるまで。生まれたときには楽器を返すだけで無く娘の音楽教師になるという条件で楽器を手に入れた。
結果として、その男と惹かれ合い、結婚して妻となって、娘にヴァイオリンを教えようとするも、誰に似たのか走る事にしか興味の無い娘達のせいで、
神器は未だコノエの手元にある。
そんな母親のヴァイオリンが響き渡る病院のお金持ち専用の特別個室でアオイは目を覚ました。
「あら、もう起きたの？
もう少し眠っていても良いのよ。あれだけの大健闘だったのだから」
「母上、己の身は己で理解できます。支障ありません」
「そう？　この病院の退院は何時でも良いけれど、スパもトレーニングルームもあるから急がなくても良いわよ。
それと…、アオイちゃんの好きなリンゴさん用意したけど、食べる？」
「…母上、頂きます。」
コノエは不格好なインパラ型のリンゴを差し出した。
不器用なら普通に切れば良いとはアオイは言うつもりは無い。

誰にでもずけずけと言うクールなアオイだが、母親にだけはそれは言えなかった。
黙々と、インパラ型と言われなければテトラポッドにしか見えないリンゴを食べ終えたアオイにコノエはニコニコしながら話し始めた。
「そう言えば、アサヒちゃんが運命の相手を見付けたって喜んでいたわ。
やっぱり、足が速い殿方って素敵よね。わたくしはたっくん一筋だけど」
脈略も無く唐突に惚気る母親は、アオイには本当に己と血が繋がっているのか解らないときがあるが、
見た目は誰が見ても娘と母は良く似ていた。
「…もしかして、あの人間の男かしら」
アサヒは姉にレースでは負けたものの、気絶しなかった分姉より速くエコーにアプローチをかけていた。
無論、Ｎｏと言わない種馬である『うませるきかい』にアプローチという形はコスパが良くは無い。
ヤれと言われたらヤるだけの種馬でしか無いのだから。
アレは己にこそ相応しい胤の持ち主だと決心したアオイは急いでリンゴを全て口に収めると、ベッドから飛び降りて走っていった。
アオイは退院許可も取らず、家の方へ向かっていった。
「孫が楽しみですね」
コノエはのんびりと窓の外に見えるその背中を見つめて微笑んだ。

途中で幾つかのショップに寄り、色々バッグに詰め込んだ後、アサヒの部屋に勢いよく駆け込んだアオイだったが、アオイの目の前には想定外の光景が展開されていた。
メタリックで露出度の高いスケベ水着で女豹のポーズで男に迫っている妹が居た。
「……」
「あっ…、姉様…」
姉妹は気まずい雰囲気になった。

「ほら、夜討ち朝駆けは戦士の華と言いますか……あれ？　…それは――――」

アサヒは姉が落としたバッグからこぼれ落ちたソレを見た。

ソレはアサヒが此処に来る前に買い、今見に着けているドスケベ水着そのものだった。

見た目はそれ程似ていない姉妹だが、男へのアプローチ戦略は同じだった。

正直、生真面目な姉が自分と同じムッツリだった事に妹は衝撃を受けたが、開き直りが速い妹はそのまま男を襲う事にした。

姉がテンパって全裸になってスケベ水着を着始めているが気にしない。

どうせ、自分でも訳わからなくなって姉が暴走する気がするが、どちらにせよ自分が６Ｖで己より速い男の子を孕めるならアサヒ的にはＯＫであった。

因みに、エコーの感想としては、女性本位で動く事が多い獣人族の女性が相手だと自分では何もしなくて良いというあんまりなものだった。

そして、一年の月日が流れた頃、アオイは双子、アサヒは三つ子の母になっていた。

純粋な人間種と比べて出産までのスパンが短い上に、一度に産む数が多い獣人の基準では寧ろこれは少ない方だった。

繁殖力が低いエルフなどからは嫉妬を込めて畜生腹と呼ばれる所以である。

獣人族の首都では空前の大繁殖期が来ていた。

その上、父親が同じであっても父親の遺伝情報は引き継がれないので血が濃くなる心配も無かった。

多額の負担の上で、『うませるきかい』を連れてきた使者団は皆出世した。

ただ、問題はあった。

既に『うませるきかい』の子を生んだ母親達がレースの優勝者でもあるエコーに英雄としての権限を与えるように言い出した事だ。
これは、純粋なエコーへの配慮では無かった。
これまでに先行してエコーの子種を孕んだ者は既に子供がいるので問題ないが、エコーに上級人権が与えられると物のように子種提供機として扱う事が出来なくなる。
その結果、既に6Vを引き継いだ子供の母親には既得権益が生まれる。
これはそういう話だった。…無論、純粋に速い者としてエコーへ尊敬の念を持つ者が居ないわけでは無かったが。
そんな既得権益の先行逃げ切りを狙う者達の目論みは実際には成功しなかった。
エルフからの二次借り受けの約束を利用して永久的に借り受けるという不義理をした場合、
獣人族上位の者達が契約呪術により命を落とす問題があったために、返納期限が迫ってきていたからだ。
獣人の国に来たエルフによって再びエコーはエルフの国に戻る事になった。

エルフの国に戻ると成長したハーベルティアを抱いたフリージアが待っていた。
「おか……」
何かを言いかけてそれを止めたフリージアと、無言で反応しないエコー。
それがハーベルティアの両親の再会だった。
木漏れ日以外にはひたすら音の無い空間。
フリージアにとっては気まずく、エコーにとっては特に感じる事の無い空間だった。
それを破ったのは、ハーベルティアの祖母に当たるエルフの女王だった。

「返ってきたのですね。それでは、引き続きハイエルフの拡大をお願いしますね」
やってきた女王はそれだけを告げると、再び何処かへと去って行った。

エルフの王国では既に五名のハイエルフが生まれている。
いずれもエコーによるものだった。
生まれ持って、他者とは隔絶した魔力と染みや混じりの無い金色の髪を持つ子供達。
それは、エルフの女王にとって、親愛であり、希望であり、呪いであった。
その夜、女王にフリージアに第二子を孕ませるように言われたエコーは、フリージアの寝室に向かった。
「あなたは…、それで良いのですか」
それだけで言いたい事は伝わると思ったフリージアは、エコーに対してそう聞いたが、
「それしかないですから」
エコーはそう答えた。
そして以前のように愛のない性行為が始まった。

愛が無くては家庭は作れないかも知れないが、愛が無くても子供は作れる。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７　しょく人

障者、それは生きた呪い。
障者、それは世界の負担。
障者、それは彷徨える狂気。
障者、それは穢れた魔力。
障者、それは無からの来訪者。
障者、それは――――――
エルフの中でも知性派を自称するソレーユ。
一児の母親でもある彼女は、障者についても研究していた。
障者は相手が旧世代の人間であれば即座に、後は種族ごとの抵抗値や対抗手段によって汚染速度は大きく異なるが、
いずれも触れるだけで相手を狂わせてしまう意味不明理解不能認識不可解の存在。
内部に魔力流ジャイロ効果を持つエコーやオーク種などは障者には襲われても影響を受けにくい構造を持ち、吸血種や蟲族もまた障者には強いと聞く。
果たして、障者の目的や、発生原因は何かを突き止めればどうにかなるかも知れない。
その為には、障者に対抗する手段を確立する事が必要だった。
オークの場合はエコーと同じ条件だという事が解っている。
吸血種などはエルフ同様に高い魔力で弾き返していると言う事でわかりやすい。
だが、蟲種の場合は解らない。
蟲種がどうやって障者に対抗しているのかを理解できれば対抗手段は増える。
そう判断したのはソレーユだけでは無かった。
人間達の社会にもそう考える者が居たようで、エコーと名指しでソレーユを蟲族に送るように人間達からの圧力がかかった。
ソレーユにはそれを指示した存在に心当たりがあったが、それは荒唐無稽すぎる想像だったために考えるべきで無いと思考を止めた。

蟲族。それは現在の弱体化した人間と獣人の天敵であり、合理的で冷徹残酷な種族である。
蟲族は触覚や翅などを除けば、姿形こそ非常に人間に似ているが、その遺伝子構造や精神構造は大きく異なる。
その美しい人型の姿はいわば年月により洗練された獲物を狙うための擬態。
人累を喰らうために進化し続けた、劣化を続けた人累と違い洗練を続けた機械的な一族。
魔力は旧人類よりはある程度だが、身体能力が獣人を捉えて食らえる程度には高い。
種族のために家庭が滅ぶのは当たり前。家庭のために個体が滅ぶのは当たり前。
『そんぞくするきかい』とさえ呼ばれる種族だった。
ソレーユの考えでは、この辺りに障者を阻む原因があると思っている。
擬態として人型をしているだけなので、倫理観は他の人型種族とは大きく違う。
人間や獣人を餌として襲う性質故に、一時は人間の目の敵にされて絶滅寸前にまで追い込まれた。
だが、獣人を遙かに超える身体能力と繁殖力を持つ蟲族にとって、再起は難しい事では無かった。
そして今も、余程己達に都合の良い条件で無い限り、人類や獣人に復讐心でも憎悪でも無く、エサを得るために襲いかかっている。
産む子供の量を存在するエサに応じて調整できる種族特性上、エサが多くても余らせる事は無い。
より多く人間を狩れる者が偉いという価値観が根付くのは仕方ない事だった。
特に最近は弱体化した人間を多く襲っているようで、人間達は対抗策として生産性の低い存在

――――身体や知能に問題がある者を蟲族に近い隔離場所で集団で放置して生け贄としている。
どちらにせよ、今の人間達には『お荷物』となる存在を抱える余裕は無い。
自分達に利益を生む者達だけで国を構成しなくては障者に対して勝負にならないのだ。
完全に余談だが、生まれ持って、身体や知能に問題があるものは獣人族なら生まれたときに殺される故にそんな問題に上がった事は無い。
更に余談をしてしまえば、それは人間が経済的に獣人を追い込めてから作られた習慣であるというのだから業は深い。

今回は、蟲族に圧倒的に都合の良い条件『うませるきかい』の無償貸し出しを条件に、蟲族を研究する者を人間とエルフから差し出す事になった。
人間の社会からやってきた研究者達は、周囲の蟲族に恐怖しているがそれは仕方ない事だ。
所謂生まれ持っての生物的弱者の成れの果て、『肉団子』が周囲に転がっているからだ。
此処は、蟲族の女王の巣。
沼地に住む水棲蜂の女王は己の子供達に研究者達と『うませるきかい』を食べるなと命じてある。
だからこそ、人間達の命は保証されている。
見た目は美人だらけのエルフの王国で生まれ育ったソレーユでさえ、息を呑むほど美しい蒼い髪と整った姿たる蟲の女王。
しかし、これは完全に人型生命を喰らうための擬態である。
美しい方が得物を騙し易いという合理的な進化の結果だった。
肉体が、精神が、魂の在り方が違いすぎる。
実物の親玉を正面で見たソレーユはそれを改めて理解した。
蟲の女王相手に『うませるきかい』が相手にするようになって一ヶ

月後、奴らはやってきた。
そう、障人だ。
障人が巣にやって来ても蟲族の兵士階級は何もしない。
そうこうしている間に、障者は蟲の女王のところまでやってきた。
そして障者は蟲の女王に触れた。
女王は気にする様子も無い。
そして――――障者が逃げ出した。
それを払うように女王は千切り捨てた。

「どうやってっ!?」
ソレーユだけで無く人間の研究者達もそう思った。
それに対して女王は答えた。
「蝶は花を吸い、蟷螂は肉を喰らう。
蝶は肉を喰らわないし、蟷螂は花を吸わない」
それは、理解しているものには理解できる言葉だったが、生憎蟲の女王以外にそれを理解できるものは居なかった。
「どういう…事でしょうか」
「ヒトは本能的に我らへの恐怖を理解する。見て解らなくとも、触れれば理解しよう」
女王はヒントは出し尽くしたとばかりにそれ以上は答える事は無かった。
ソレーユには何故女王が障者を『ヒト』と呼んだか解らなかったが、それが大事だとは認識した。
障者は確かに靄で出来た人型だが、それは新たな『亜人』の一種なのだとはソレーユには考えにくかったが、女王の言い方にはそういう意味に感じられた。
……本意までは解らなかったが。
人間の研究者達は蟲族の肉体に障者の忌避成分があると判断して、それを提供するように願い出たが女王には契約外だと一蹴された。
ソレーユは女王が煙に巻いても嘘をついたとは考えていない。
だから、寧ろ蟲族の精神性や魂に障者が取り憑かない原因があるの

だと狙いを付けた。
人型生物をエサとしか認識しないその存在そのものが障者を阻んだと。
だが、それが事実だとすれば障者の正体というのは――――
それはあり得ない想定だった。
第一どこから来たのかはソレーユには見当も付かない。
こんな時に追放された姉が居ればと思った。
だが、それが事実だと仮定すればそれは――――
「……障者の正体はまさか――――」
女王が一度だけガラスのような瞳を向けたようにソレーユは感じた…気がした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８　悪意

ソレーユの想定が正しいとなれば、蟲族同様に他種族から見れば倫理観が崩壊している吸血種とも接触する必要があった。

吸血族はそもそも人累基準で倫理観が違う蟲族や、相手の倫理観を理解した上で強者の意志を貫く竜族とも違う。

己の倫理観を正しいものとして押し付ける上に、他の種族からすればちょっとずれた倫理観で完成している。

それは、嘗て竜族などの単体で強い数種類の例外を除き、人累の殆どを吸血種が支配しかけた狂気の歴史が物語っている。

現在も存在する当時からの吸血種の君主はそれを支配される側の幸福だと心から信じていた――――いや、今も信じているのだから恐ろしい。

人間も獣人もエルフも他の種族も皆、吸血種の支配下で安寧で幸福な生活を送らされた。

その時の恐怖が、対吸血種の技術としての共同意識を造るための技術としての信仰が作らせたほどだ。

現在人間達を中心に信仰されている神聖教会の祈りや作法は、全て吸血種を退けるための合理的な行動を祈りという名前に置き換えたものだ。

例えば、吸血種を滅ぼす事に特化した呪文を付与した水を聖水と呼んだり、吸血種にとっては人間にとってヒ素に当たる銀で造ったシンボルを祈りの道具へとした。

だが、恐ろしさで言えば蟲族も負けていない。

そもそも機械のような合理主義の塊故に、倫理観という想定自体が存在しない。

人間やエルフの使者の横で、元人間であった肉塊を食事として悪意無く食べている時点で察する事が出来る。

悪意無く悪夢そのものの在り方を取れる種族が彼女たちだ。

弱点は魔力抵抗に乏しい事と、寿命と回復能力に劣る事。

だが、それは命を使い捨てにする蟲族にとってはディスアドバンテージになり得ない。
寿命が早く尽きようが、それまでに巣に貢献すれば元が取れる。
損傷してとして回復させるより、使い捨てて新しい個体が生まれた方がコストパフォーマンスが良い。
加えて、寿命のサイクルが短いと言う事は、進化のサイクルが早いと言う事。
他の種族より圧倒的に早く最適化が行われる。
命を惜しまぬ全体主義にして、一匹一匹が精鋭。
それが合理的に無感情に襲ってくる。
そして必要以上の代償を捧げなければ対話すら認めない。
人間種が天敵だと定めるのもおかしくない種族であった。

「…質問を幾つかしても良いですか」
ソレーユの横で人間の研究者が恐る恐る女王に質問をしようとした。
「質問をした者が我らのエサとなるので良いのなら好きにせよ。安心するが良い、質問した者以外には喰わずに聞かせてやろう」
それは、質問をしたものが喰われても、他の者がその質問の答えを聞く事が出来るという、種族で物事を考える蟲族らしい発想だった。
人間達は質問を途端に引っ込めた。
そしてソレーユの方をチラチラと見だした。
己以外が生け贄になって欲しいという願いが見え隠れしていた。
ソレーユはそれを敢えて無視した。
「犠牲なしで質問というわけにはいきませんか…？」
人間達は弱々しく女王にそう聞いた。
「それが質問という理解で良いか？　――――答えは否だ」
女王がそう言うと、それを質問した者の周囲から上級兵士階級の蟲族の女王にて美しい女性達が集まってきて、発言者の男を肉団子に変えた。
それを見た人間達やソレーユは血の気が引いた。

蟲族以外での例外はエコーだけだった。
「いやぁあああああっっ!!!!」
「嘘だ嘘だ嘘だうそだうそだうそだ――――」
「キーロォさんっ、そんな…」
「ひぃぃ…っっ…ばけ…も…の…」
人間達が口々に叫んでいた。

暫く恐慌状態であった人間の研究者達だったが、暫くすると落ち着き、人間の集落の中で生産性に劣る者を集めて生け贄として一年間毎日送るという条件で、
十二個の質問を取り付けた。
ソレーユから見て、その内の幾つかは有用な質問はあったが、しかし大半が無駄な質問だった。
その程度の質問のために同族を売る行為をソレーユには理解できなかったが、
個体数が少なく、王族や一部の貴族を例外として大半の者が高水準で同程度の能力であるエルフと、
個体数が多い上に、個体によって能力差が激しく、明確に優秀な者と無能な者がいる人間では倫理観が違うのは仕方なかった。
自分達だけを根拠の無い安全地帯に置いた上という前提条件があれば、人間も蟲族ほどでは無いが全体主義の合理思考だとソレーユには思えた。
自分達が安全圏に入った途端、次々と質問を始める人間達の姿をソレーユは悪意だと理解した。
勿論、ソレーユの予感が外れているのなら、人間達の質問は的外れでも無かったのかも知れない。
しかし、少なくともソレーユの予想が正しければ、ここから先は蟲族よりも吸血族に話を聞くべきだと認識していた。
ソレーユは、蟲族への『うませるきかい』の貸し出しが終わった後は、吸血族の所に行くべきだと女王に進言しようと思っていた。
ただ、大きな問題は吸血族の君主は『うませるきかい』をそれ程必

要としないであろう事だった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９　ししゃ

『うませるきかい』の蟲族への貸出期間は終わった。
現時点でも人間にとって脅威である蟲族へ次世代における更なる強化を約束した事は、
人間が障者をこの世界から消滅させ、再び科学技術で覇権を握らなくては人類にとっては長期にわたって首を絞める事になる。
その為に、十二の選択と呼ばれた蟲の女王への質問は、後に人類によって無理矢理美化された成功談として語られる事となった。
一方、ソレーユはその二ヶ月後、エルフの女王への進言により吸血族の君主の所に行く事になった。
吸血族の君主はソレーユの予想通り、その種族特性から『うませるきかい』による繁殖能力を求める事はしなかった。
だが、何処から仕入れたのか、竜の血の匂いがする＝『ドラゴンスレイヤーが可能な大英雄』の情報を入手しており、
それだけの素質を持つ者の血を提供するなら、情報料をその分差し引いてやろうと告げたために、エコーも同行する事となった。
エルフの女王でさえ、己以上の年を生きている吸血族の君主には苦手意識があった。
ソレーユには、吸血族の君主への謁見は気が重かった。

「遙々遠くからご苦労様。ところで、あなたもわたくし様の眷属になってみない？」
いきなりの種族変更のお誘い。
倫理観ぶっ壊れで有名な吸血族の会話によるボディーブローが、エルフ族では図太い方のソレーユにも刺さった。
吸血族の君主リイン・ルイ・クァントァカネーノは、鮮血のような深紅の縦ロールとチャイナ服と扇子が似合う女帝だった。
「そう言えば、ハイエルフが久し振りに生まれたらしいわね。どうか

しら、ハイエルフ素材の吸血族なんてきっと素晴らしいわ。
是非、提供するべきじゃ無いかしら」
一方的に己の都合を要求してくる女帝。
因みに要求されているソレーユ自身も一児のハイエルフの母である。
要求を呑むつもりは全くない。
現在、女帝の右肩には『風紀委員長』と達筆に書かれた腕章があるが、吸血族の常識は他種族の非常識。
吸血族の風紀なんて、皆吸血族になれば女帝の元に統一されてハッピーという狂いきった価値観しか無い。
「…どうして他の種族がわたくし様の傘下に挙って入ろうとしないのか不思議で仕方ないわ。
布教活動が足りないのかしら、ねえ、客人その1どう思う？」
ソレイユは苦笑いしか出来ない。
布教活動は充分すぎるほどに他の種族にも届いている。その上でのＮｏなのだ。
「じゃあ、客人その2はどう？」
「僕は吸血族になった時点で無価値になるので結構です」

「ああ、そうだったわね」
肩をすくめて両手を軽く肘を曲げて持ち上げるオーバーリアクションで女帝は頷いた。
吸血族には子供を出産する文化は無い。
それ故に、優秀な雄を番って優秀な子を生む思考は生まれない。
吸血族は血を媒介に相手の魂を変質させて眷属に変える。また、死霊術に特化した魔法を持つ。
魂を変質させられた者は、心臓の鼓動で活動する事を忘れ、肺での呼吸を忘れ、口で捕食する事を忘れ、脳で思考する事を忘れる。
魂そのものが本体となる。
心臓も肺も脳も形だけのものになる。
故に、首を千切られようが、心臓を貫かれようが、細胞が活動して

おり、死んだ自覚が無ければ死なない。
厳密には心臓も脳も形だけのものになるので既に死んでいるとも言える。
肉体はあくまで魂にコントロールされる容れ物。
言うなればゾンビである。
というか、吸血族はゾンビであり、ゾンビが吸血族とも言える。
そして、細胞は連結する事無く個々に活動しており、成長という概念は無い。
代わりに改変という概念がある。
他者から血を介して取り組んだエネルギーを以て自身の肉体を少しずつ改変する。
だから最初が弱くても生き続けて血を吸う限り、理論上無限に己を強化できる。
吸血族の女帝も元はか弱い少女だったと自称している事は有名だった。
加えて肉体が有機的には生存活動を行っていないのだから、子供を生む事が出来ない。
従って、『うませるきかい』に子供を産ませる役割を持っての吸血族への貢献は出来ない。
更に言えば、『うませるきかい』を吸血族に迎えれば生殖行動が不可能になり、その価値がなくなる。

「ねえ、客人その1。どうしてなのかしら？
他の種族は進んで私の眷属になろうと思わないのが不思議で仕方ないわ？」
不思議で仕方ないのはあなたの頭だと内心で呟くソレーユ。
彼女の思考を嘲笑うように女帝は話を勝手に続ける。
「元の種族を止めて、序でに生物を止めて、わたくし様へ絶対服従を誓うだけでしょう？」
普通の種族は生物をあっさり止めようとは思わない。
そんな倫理観投げっぱなしの女帝へツッコミを出来る者は居ない。

魔王と呼ばれるだけのプレッシャーを自然に放つのがこの女帝である。
「わたくし様への絶対服従以外にはそれまでの生活をそのまま保証するといっているのに不満があるのが解らないわ？
だって、今までそれぞれの種族や国家の法律や経済活動に縛られて生きてきているのでしょう？
そこにわたくし様という枠が加わるだけでしょ。
法律の範囲内で生活し、己の経済力の範囲で行動し、これからはわたくし様の支配の範囲で死活するというだけなのに…。
不満が発生する理由なんて無いじゃ無い」
そんな理由で他の種族の国がどれだけ打撃を受けたことか。
特に被害が大きかった人間や獣人の国民が聞いたら憤死するかもしれない。
人間が他の種族に対して攻撃的になった理由の一つに、間違いなくこの女帝の存在がある。
一時期は元人間の死者の比率が生きた人間を上回った時期があった。
人間達は数日前まで家族や親友だった吸血族と殺し合っていた。
そんな暗黒時代を越えて、人間は以前以上に排他的になったのだ。
人間が地上の覇者になってからは、特に吸血族に対しては熾烈な反撃をしていたが、女帝が未だ生きているという点においては吸血族が上手だった。
といっても、吸血族はその数を大きく減らした。
代わりに、政治中枢の者や英雄の家族を眷属に変える策略を使ったり、色々な戦略で今日まで生き延びた。
それでも、障者が出現する前には女帝をあと一歩の所まで追い詰めていたのだ。
あと数年障者が出てこなかったらこの世界から女帝は消滅しており、その眷属である他の吸血族も合わせて灰になっていた。
人間にとっては巨悪の象徴であり、時に魔王と呼ばれるが、女帝からすれば人間達は聞き分けの無い不良生徒にしか見えていなかった。

早くわたくし様が秩序を正してあげないといけないわ、程度にしか思っていない。
細胞を自在に変化させ続けられるので、気に入った眷属には文字通り手を加えて、四本の腕を持った元エルフの眷属がいる。
というか、今まさにソレーユに紅茶を差し出している。
女帝はそれに眷属その１１９２と呼んでいた。数の小ささが人間の反撃の成果を物語っている。女帝の発想に永久欠番は無く眷属は気軽に穴埋めされる。
そして眷属その１１９２――――それはソレーユが幼い頃に失踪した近所のお姉さんだった。
これは、元同族の働いている姿を見れば客人その1も進んで眷属になりたくなるかしら？　という女帝の配慮である。
職場体験で先輩の働く姿を見てみない？　なんてノリで女帝はいるが、ソレーユには死者にされて肉体を弄ばれた同族に給仕されるなんて悪夢そのものだ。
「客人その2、わたくし様に良いアイディアがあるわ。
そこの客人その1と子供を作り続けてその子供をわたくし様の眷属にしていくなんてどうかしら？
そうすればハイエルフ素材の眷属がいっぱい増えて、わたくし様もいっぱい幸せになれるわ。
どうかしら？　それなら今回貰った資金は全て返納してあげても良いわ。結納金みたいなものね。
素敵なアイディアでしょ？」

「うっうぅぇぇぇ」
遂にソレーユはその場で吐いた。
自身の倫理観が全てに通ずるスタンスの純白の邪悪は森でひっそり生きていたエルフには刺激が強すぎた。
というか、他の種族には到底理解できない思考回路故に、人間には女帝が滅ぼせなかったのだ。

「取り敢えず、今回はお支払いした報酬での契約通りで話をしましょう。
勧誘についてはまた今度と言う事で良いですか？」
耳を押さえて目を瞑り吐き続けるソレーユが使者として使い物にならなくなり、これ以上女帝の話を聞かせては恐らく精神的に危ないと判断したエコーは、
女帝に本来の契約内容に話の路線を戻させる事にした。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０　あなたに届きますように

女帝が「仕方ないわね。じゃあまた今度勧誘してあげる」と言って話を奇跡的に終えてくれた事でソレーユは何とか本来の目的を果たせる事になった。

とは言え、そこに至るまでに数分吐き続けたが。

平常運転の女帝の狂気染みた正気に胃の中のものが無いにもかかわらず胃液を戻してしまったソレーユだが、

そもそも彼女が吸血族の女帝に強力を依頼しようとした理由は女帝の持つ固有といっても良いほどの強力な死霊術である。

ソレーユは、障者の正体を死霊に類似したものだと考えた。

故に、女帝ならば障者と対話が出来るのではと結論づけたのだ。

その結果は――――

「結論から言えば、このままじゃわたくし様でも対話は無理そうね」

――不可っぽかった。

「森で引きこもったエルフには難しい話をしても良いかしら？

ふふっ、気遣いの出来るわたくし様に惚れたら眷属にしても良いわ」

取り敢えず二人してスルーした客人達に女帝は腹を立てる事も無く、エルフには難しい話とやらを始めた。

「人間のＣｏｍｐｕｔｅｒって発明を知っているかしら？」

「ええ」

やたらと良い発音の女帝だった。

一応、エルフの中で知性派を気取るソレーユである。

人間の文化だからと言って無知なわけでは無い。

「なら良いわね。

データを全く違うＯＳ用のソフトに移しても只のクラッシュしたゴミデータにしかならないでしょう？

例えば最新の端末機器のデータを最初期のコンピュータで見ても文字化けしか写らないわ。

そもそもキャパシティが足りないかも知れないわ。
まあ、そういう理由で対話もできないし、憑かれると狂うのよ」

ソレーユにはその例えが良く解らなかった。
というか、何故女帝にそれが理解できたのかも理解できない。
倫理観がおかしいだけで天才だからなのか、キチガイだからこそキチガイな理屈を理解できたのかとソレーユは考えた。
因みにエコーも同じ結論に至っていた。
「恐らく、この世界より情報量が多い世界、まあ上位世界とでもしましょうか。
そこから来たのよ。障者という存在は。
で、下位世界とは魂の構造が違うから、取り憑かれた者は、わたくし様達からはクラッシュした文字化けにしか見えない。
つまり狂ったようになるという寸法ね。
上手く変換出来れば何とかなるかも知れないけど、わたくし様でも難しいわ」
「難しい…という事は不可能では無いという事ですか」
ソレーユは女帝の言い方からその様に認識した。
「当たり前じゃ無い。だって、わたくし様よ?」
ソレーユはここに来て障者への糸口を掴んだ気がした。
「取り敢えず十人か二十人くらいの素材を連結させた上に、ある程度フォーマット、要するに真っ白に消しちゃえば出来るんじゃ無い?」

ソレーユは再び吐きそうになった。
「貴方達の要求を先回りして理解した大天才のわたくし様は、既にそこらから素材を集めてくるように眷属達に命令しているわ。
そうね、扉の向こうに用意しているから連れてこさせるわね」

自信ありげにチャイナ服の下から押し出されている大きな胸を張るリイン。
ソレーユはそれを聞いてまた吐いた。

獣人や人間など、大人から子供まで総勢三十三名が女帝の眷属達に引き摺られて連れて来られた。
リインは自身の喉を切り裂き、血を周囲に振りまくと何処からでているか解らない声で呪文を唱え始めた。
泣き叫ぶ少女、絶望した男性、抱きしめ合う親子、神に祈る女性、彼ら彼女らは皆、例外なく生きたまま魂を演算する媒体へと変えられた。
「完成ね。名付けて眷属未満その１３」
元生命体、現眷属未満その１３は障者の受け皿として、障者が多発する場所へと眷属達に運ばれていく事となった。
そして障者に取り憑かれても勝手に動かぬよう、その場所で杭で地面に打ち付けられた。

その数日後、
「見張りの眷属から連絡が来たから行ってみましょう。どうやら成功したようよ」

「七九ｕ０９―ｊ会＆（＃＃、＠、ｗｗｗ」
当初とは少し違う場所で杭に打ち付けられた眷属未満その１３が言語にならない言葉を叫んでいた。
最初、眷属未満その１３には障者は取り憑こうとはしなかった。
だから眷属達を使ってリインは眷属未満その１３を別の場所に移動させて隠した後、新たに捕まえさせた鳥の獣人の少年を囮にして追いかけさせ、
急に囮を動かす事で眷属未満その１３に障者を取り憑かせた。

リインはピアノを弾くように指を動かしながら死霊術の呪文を謳いあげた。
すると、眷属未満その１３は震えだし、その色と容を変え始めた。
眼鏡をかけた不細工な人間の男のような何かになったそれは、徐々

に喋る言葉をエコー達が理解できる言語に近づけ始めた。

その言葉は――――

「タスケテタスケテタスケテたすけ――――――」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１　神は自ら助く者『だけ』を助く

オタクは皆キモいわけでは無い。
だが、キモい奴は大体オタク。
こんな言葉を聞いた事は無いだろうか？
これは虐げられる者への侮辱の一例だ。
社会の弱者、敗北者、底辺、ゴミ、クズ、不要物――
劣る者はとことん虐げられる。
社会は弱者には厳しい。
いや、世界は弱者には厳しい。
考え方を逆にすればもっとスッキリする。
世界を動かす事が出来る者が強者。
世界に着いていける者が普通。
世界に着いていけない者が弱者。
弱者が世界に虐げられるのは、救いを与えられないのは自明の理なのである。

例えば周囲にキモいと言われる者達は現実には居場所がない。
だから現実以外の場所へ逃避する。
そういう傾向が少なからず発生するのは別に不思議な事では無い。
現実には高スペックな男性が高スペックな女性を手に入れる。
逆にキモいオタクが現実で美少女と付き合う可能性はほぼ無い。
無論、幾つかの例外はあるが、これはあくまで統計的な話である。

世界に幸せの定数があるとすれば、その幸せを手に入れる力の強い者からそのパイを取っていく。
資金力・身体能力・学力・容姿――そういった力が何一つ無い者が幸せの置いてある場所に辿り着いた時にはもう何も無い。
世界はそうできている。
先行して幸せを手に入れた者が、世界をそうやって再生産している。

それは何もおかしい事では無い。
その戦いは、星に生命が生まれたときから連綿と続く由緒正しい戦いなのだから。

「タスケテタスケテタスケテたすけ――――――」
障者を宿した者、否、障者が叫ぶ。
それは杭に撃ち抜かれた痛みか、それとも元の世界に撃ち抜かれた痛みか。
障者達は不完全な異世界の転移者たちだった。
優生学という学問がある。
ある国家はこの学問を信仰してしまい、そして失敗した。
彼らはこの学問を信仰するべきでは無かった。信仰では無く、研究すべきだったのだ。
優生学は学問であり、シェパードやサラブレッドを生みだした実績有る学問である。
人間にだけ適用されないなどと言う事は無かった。
だが、事実を事実と言うだけで無く、心酔してしまった事が間違いだったのだ。

その世界とはまた別の、優生学を成功させたとある世界が存在した。
その世界では、賢くたくましく美しい者が正義とされ、愚かで貧弱で醜い者が悪とされた。
かくしてその社会は大成功した。
――――――切り捨てられた弱者達に目を瞑れば。
その切り捨てられた弱者達は現実から逃避し、神に祈った。
我々が強者でいられる世界をくれ。触れるだけで敵を打倒できるチートを持って夢物語なファンタジー世界へと送ってくれと。

その願いは聞き届けられた。
…但し、少し歪んだ形で。
それが障者。上位世界の敗北者。異世界への逃避者。優生学を憎む者。
壊れた情報生命体。壊された精神生命体。
そんな彼らの世界では社会的に行われた優生学を身に宿した青年がいる。
『うませるきかい』『６Ｖ』『大英雄素質保持者』『エコー・グッドマン』
障者達はその青年がどのような存在か、肉の器を通じて凝視する事で理解できた。
そこに居る者を強く意識すれば、存在レベルで知覚できた。出来てしまった。
許せる筈が無かった。赦される筈も無かった。
まさしく優生学こそが己達を否定した。その生きた証明が存在しても良いわけが無かった。
故の激痛。故の激怒。故の激昂。
「おまえ　など　いなければ　おまえ　など　いなければ　おまえ　など　いなければ」
依り代となった眷属未満その１３から眼鏡をかけた人間の男に変わった障者は、憎悪という言葉も生やさしく感じる怨嗟の視線でエコーを見つめた。

障者の記憶や感情は、眷属未満その１３に予め仕掛けられた魔法により、リイン達に流れるように飛び込んできた。
勿論、汚染されないように処置はされている。
だから、障者の過去が筒抜けでエコー達にも理解できた。

「そう、辛かったのね」
女帝リインが慈悲深くそう言った。

彼らが望む全てにおいて自分を肯定してくれるヒロインのような優しさで。
「辛かった。苦しかった。悲しかった――――――で、それが、どうしたのかしら？」
本当に意味がわからないような顔でリインはエコー達の方を向いてそう言った。
ソレーユは知っていた。女帝は人間感覚だと完全な人格破綻者なのである。
「さあ」
そしてエコーも相手が弱者だからと慈しむ人間では無い。
そもそも彼も自分にさえ愛情を持てない人格破綻者なのだ。
それもソレーユは知っていた。

「ゆるさない　ゆるせない　おまえたちだけ　は　ゆるさない」
その怒りの前でさえ女帝の余裕は変わらない。
「わたくし様はわたくし様が赦すから大丈夫よ？
何か問題あるかしら」
お前何様わたくし様。そんな素敵に無敵な女帝様には弱者の怒りなど興味もわかない。
この世界でさえ、蔑ろにされるのか。
格下の世界に降りてでさえ、そこでさえ格下扱いにされるのか。
まるで同級生に対等に扱われないから下級生の集団に行ったのに、そこでも格下扱いされた学生のような怒りをその障者は持っていた。
だが、少なくとも障者自身にはそれは正しい怒りだった。
強い感情は時として力になる。

眼鏡をかけた男は、憎しみの余り人間の容を捨てた。
そもそも、人間の形の感覚など薄れてくるほど久し振りであったし、その器に入っていた時間も短い。
だから直ぐにその器の縛りを壊す事が出来た。

黒ずんで触手の生えた、人間では無い、別の何かへと変わっていく。
三十三名の肉体と魔力と魂、それに上位世界から持ってきた存在力を兼ね備えた化け物。
その貌は――――――、憎悪に似ていた。
結合した触手で作られた、憎しみに歪んだ巨大な人間の顔が、死霊術の縛りを振り払って襲いかかってきた。
当初それを縫い付けていた杭は、今は男の右目に刺さっている。
その右目から黒ずんだ血――――明らかに触れてはいけない液体を流しながらエコーへと飛びかかってきた。

「此方のエルフはわたくし様が保護しておいてあげるわ。
だから、貴方のお手並みを拝見させて貰おうかしら」
「――褒美が眷属というので無ければお好きにどうぞ」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２　敗者としようしゃ

世界は憎しみに満ちている――――
――――弱者にとっては世界は憎むしかないものだった。
世界は希望に満ちている――――
――――強者にとっては世界は従えることのできるものだった。

世界は一つであっても幾多の側面を兼ね備えている。
そして、その側面は観測者の数だけ存在する。
己に価値を持ちたかった強大な弱者たる障者。
己に価値を持てなかった強大な力を持つ『うませるきかい』。
倒さなくてはならない強者を倒そうとする弱者。
倒しておくべき弱者を倒しておく強者。
力を求めた者が手に入れた力と、力を求め無かった者が手に入れた力が激突する。

『優生学』という学問がある。
この学問は、チワワの両親からはチワワ、シェパードの両親からはシェパード、黒人の両親からは黒人、白人の両親からは白人の子供が生まれるというごく当たり前の事実から成り立っている科学だ。
賢い両親からは賢い子供が生まれやすく、美しい両親からは美しい子供が生まれやすく、遺伝病が多い家系からは遺伝子疾患が発生しやすい。
事実に立脚する事ではあるが、賢くない両親やその子供、美しくない両親やその子供には認められない、遺伝子欠陥が多い家系には認めたくない残酷な事実である。
世界は平等では無く、生まれ持って能力の低い者は努力しても、生まれ持って能力の高い者には届かない例は枚挙に暇が無い。
個体値の低い存在が努力値を重ねたとして、高い個体値で同じような努力値を備えた者は当然のように乗り越えられる。

結果が出なくても必死で努力した底辺は、結果が出るのが楽しくて苦痛無く努力するエリートに戦わずして敗北する。
ゲームでも序盤で手に入る低種族値のキャラクターは次第に使われる事も無くなり、レギュラーを高種族値キャラクターに奪われる。
それまでの貢献よりも、これからの貢献に期待をおかれて。
その在り方は、年功序列（集落自治主義）を駆逐した実力主義（純粋利益主義）社会の考えそのものだった。
この学問の中核を造った理論は『進化論』だ。環境に適応した存在が淘汰により生き残るという理論。
その環境における優れた者が生き残りやすいという理論。
環境が変わらないならば、環境を固定できるなら、定められた能力が高い者が生き残りやすいという理論。
これを文明社会に適応させたもの『社会進化論』が優生学の母体である。
つまり、社会で生きていくのに健康で美しく賢い者が有利だから、自分達の陣営を健康で美しく賢い者で構成してしまう。
そうすれば、不健康で醜く愚かな不純物を含む集団に対して優位性を持てる。
天才と凡人と愚者が混在する集団より天才だけで構成された集団の方が勝利しやすい。
わかりやすく言えばそういうことだ。
上位層から愚者が生まれる可能性や、下位層から天才が生まれる可能性が遺伝子管理による差別への反論となりそうだが、
上位層から天才が生まれたり、下位層から愚者が生まれる可能性の方が統計的に高い。
ネズミの上位よりチンパンジーの下位の方が賢く、チンパンジーの上位より人間の下位の方が賢い。
ならばネズミやチンパンジーの集団に期待するより人間の集団に期待した方が良いのは当たり前の事だ。
被支配者の凡人の集団から天才が生まれても、支配者たる天才の集団からはそれ以上の大天才が生まれている事実がある。

下位層に甲斐甲斐しく税金を使ってやるメリットは、実は民主主義の票集めと使い捨ての駒の用意以外には集団としての実益が無い。
国家にとっては、下位層として優先的に切り捨てられる人々が泣きわめく声が鬱陶しいだけである。
そんな考えを使い方によっては優生学は肯定してくれる。
社会生命体が社会の在り方をある程度固定できるという前提の元に、遺伝子の拡散によるリスク回避の考えは効力を大きく失う。
元の集団から不利な存在を間引いて有利な存在を増やせば、集団を構成するピラミッド自体の高度が上昇する。
これ自体には何の間違いも無い。
だが、問題が二点ほどある。
誰だって己の足を引っ張る者を排除するときは必死に相手を蹴落とすが、己が足を引っ張る側として切り捨てられるときは必死にしがみつく。
要するに、学問で無く政策として行う場合には、切り捨てられる側の事は考えられていない事である。
それに加え、政策として行う場合、その政策を学問でも社会運営でも無く信仰として捉えて他者を見下して優越感で己を満たすために使う者が発生する事。
科学を研究すること、宗教を信仰する事に問題は無くても、科学を信仰したり、宗教を研究しようとすると矛盾は生み出される。
だから優生学には使い方が重要なのだ。
科学は普遍であっても、それを実行する者は万能では無い。
寧ろ、質量保存、エネルギー保存、等価交換の科学の普遍性こそが全てにコストを要求する事で万能をこの世から奪っている。
優生学は上手く運用すれば組織に効率化を生み出す事が出来るだけの科学的手法の一つに過ぎない。
そして、切り捨てられた者達には何処までも残酷な真実を無慈悲に押し付ける凶器になる。
優生学という学問には何の悪も無い。
だが、優生学を利用する者には善悪が存在するのだ。

秩序と技術によって固定される環境の中で、その環境で優れたとされる遺伝子の者が上位層として幸せを享受し、
生き残り子孫を残すという本来生物の目的の根幹そのものを役割とする。
反面、その環境で優れていないとされる遺伝子の者は生き残り子孫を残すという生物の目的を自主的に放棄する事を結果として要求され、
上位層が更新される度に、更に相対的に下位へと進んで劣悪な環境へと追いやられ、最後には無価値か負荷として捨てられる。
そして、社会全体の幸福のために、優生学を使って切り捨てられた『逆６Ｖ』と呼ばれる全ての個体値が低レベルな人々にとっては、優生学は敵でしか無かった。
存在そのものが赦せない巨悪でしか無かった。
障者は逆６Ｖと呼ばれた人々の成れの果てだった。
例え努力したとしても大した結果は出ないと期待もされず、それ以前に努力の段階で躓いてしまう全個体値最低クラスの者。
前の世界で切り捨てられた魔力生命体。
呪いで構築されたバグ生命体。
救いを求めるウィルス生命体。
次の世界でこそ幸せになってやると思ったのに、新しい世界でもまたも捨てられる側で生きていくなんて許容できるはずが無い。
故に、障者は生ける優生学を憎む。
絶対にその存在を許しはしないと。

取り憑いた障者は一人。取り憑かれた肉体は実に三十三名分。
その上、リインによって眷属未満とされた肉体は、本来の眷属ほどではないが、高い不死性を兼ね備えている。
つまり、単純に強固な生命体。
ある意味で障者たちがこの世界に来る前に手に入れたかった力と言えた。

例え、生前以上に醜い姿になったとしても、彼らが求めた理想とはかけ離れていたとしても、
歪められていたとしても、歪んでいたとしても、歪み落ちていたとしても、世界はその願いをかなえていたのだ。

頭だけの容になった障者は、黒い煙を首の下から噴き出していた。
その形は見ようによっては、先程眼鏡をかけていた男であった頃の大きさの肉体にも見えた。
煙の体の上に巨大な醜い頭が乗った怪物のようだった。
だが、その悲しい怪物にエコーは同情も温情もない。
自分が虐げられても働かない感情が、虐げられる他者に働くはずなど無い。
彼はただの『きかい』でしかないからだ。
残酷なまでに、冷酷なまでに、無情に非情にオークとは比べ物にならない速度で体内を高速循環する魔力に生み出される身体能力の強化。
その魔力の運用理論にソレーユは長く会っていない姉の姿を幻視した。
一度でも止まってしまえばトルクに劣る魔力運用システムのエコーは形勢が崩れる。
だから一切の容赦なく、地面を砕き、発生した石が地面に落ちる前に、掴んで投げ、蹴り飛ばし、障者を傷つけた。
石は歴史上最も人間に使用された武器だ。
相手が普通の人間ならそれで充分殺せた。
しかし、相手は普通の人間では無かった。化け物になった元人間だった。
障者は石を投げられることには慣れていた。
生前、散々遊び半分で石を投げつけられて、遊ばれていた。玩具にされていた。
故に、その攻撃には更なる憎しみが燃えた。
顔に刺さって埋まった石をはじき返すように、凄まじい速度で周囲

に飛ばした。
リインは障壁で己とソレーユを守っていた。
エコーには障壁を張るだけの魔力が無かった。だが、エコーならどうにかするとリインは期待していた。

「あるべき秩序を正しなさい」
その応援の言葉が示すとおり、リインにとってはこの戦いは下位世界に移って相対的に強くなった力に勘違いした弱者に、
弱者は何処へ行っても弱者であるというあるべき真理を定める戦いに見えていた。
異世界でチートを貰って勘違いしようとも、所詮負け犬のままで変わらず、変わろうとせず、
生前以上の幸福を求める者に所詮負け犬は負け犬だと教えなければならない。
そんな意志を持つ彼女の腕で『風紀委員長』の腕章がはためく。
女帝も元々は強くは無く、今ほど美しくも無かった。
今の美しく強い彼女は吸血族としての種族の固有能力による弛まぬ自己遺伝子改変の結果である。
悪く言えば、血という資産を使ってステロイド剤や整形を繰り返したようなものとも言える。
余談だが、太った者に対して一番厳しく当たるのは、昔太っていて現在痩せている者だという。
『生存者バイパス』という名前なのだが、己がそこを脱した事が基準となるために、そこを脱せない者が、脱しようとしていない者が愚かに見えるのだ。
吸血女帝に人間の価値観を無理矢理当てはめるとすれば、この『生存者バイパス』が適応できる。
彼女には自己の望みの実現に行動が必要なら、行動を起こさない人間が理解できない。
他者から奪ったものをエネルギーとして己を変化・向上させるという行動を行い続けて今の彼女を造っている。

紅い髪が良いなら遺伝子を紅い髪に改変し、目の色が薄くて不満なら、血液のような淀んだ深みに改変する。
単にそれだけの事だ。吸血族にとって己の遺伝子は親からも受け継がず、子にも受け継がれず、ただ己だけのものである事も大きい。
手法はどうであれ、何の行動をも起こさず、元の己に不満があるにもかかわらず、不満を募らせるだけの存在には価値をそれ程見出せない。
女帝に言わせれば、自身の細胞を増やしたり、進化させない事は「アミノ酸としての意識が低すぎるわ」と言う事だ。

腕の中に握るように生み出された１ｍの魔力の非常に薄い筒が二本。
これだけ薄い魔力でも、高出力が内在しており、放出する適性の低いエコーには厳しかった。
故に、株や為替の『空売り』の様に先行して魔力を行使するために、後で返す事を条件に世界から魔力を借り受けた。
通常の魔法は魔力を消費して行われるが、この術式であれば魔法を行使した後に魔力が消費される。
そして、その筒には込められた魔力を元手として、周囲の魔力を吸い寄せて放出する術式が込められている。
つまり、自身の魔力が周囲の魔力を呼び寄せて、その周囲の魔力を消費する魔力として支払うという仕組みだった。
まさしく、一億円借金して二億円稼いで一億五千万円利子を付けて返し、五千万円儲ける資本家のような在り方。
本来的に支配者層で無ければ理解し得ない経済構造。
その魔力の流れがソレーユには見えていた。
それは、リスクを抱える事を苦手として借金を嫌うエルフには理解しがたい思考。
寧ろ人間や獣人などが得意とした思考パターンだった。
そして、それを魔法において再現しえる存在など、ソレーユには一人しか思い浮かばない。

リユーン・リエンシエル。
追放された禁忌の科学の徒。大天才。王族に一番近い貴族。狂えるエルフ。奴隷商人でもあったヴァンケル・グッドマンの共同研究者。
そして――――ソレーユ・リエンシエルの実の姉。
「それは姉さんの…っ!!」
獣人や人間の経済の虚構からイメージされて創られた魔法術式。
『ダブルウィッシュボーン』
手に握られる側から先に向けて、欲望が唸る様に音を立てて震える吸収口にて排気口。
使用者に借金が返せなくなったときの破滅するリスクを加える代わりに、強固な魔力ブーストを行い、
その副作用として、ダブルウィッシュボーン自体が凄まじい強度を実現する。
障者の顔から飛来してくる石を野球のバッターのように打ち返す。
それは一見遊んでいるようにさえ見えた。
飛来物が無くなると今度はエコーは足場の石畳へとダブルウィッシュボーンを叩き付け、
跳ね上がった飛礫を全て障者の巨大な顔の同じ部分へと打ち返した。
同じ場所へ貫通され続ける石の弾丸は、押し出されるようにどんどん障者の頭を押し抜いていき、遂には脳へと突き刺さった。

障者は悲鳴を上げながら死を自覚したが、その身体は普通の人間の身体では無く、死なない吸血族の眷属未満という仕様だった。
いつまで経っても意識が消えない事で、障者は漸く余裕というものがわいてきた。
そう意識すれば、肉体損傷の痛みも気のせいである自覚さえ出てきた。
「しなない？　しなない!!　まけない　かてる!!!!」
障者は貧弱な矮小な煙の身体に支えられた巨大な頭で満面の笑み

を浮かべると、敗北し続けた人生で初めて勝者になれる、
そしてこれ以降も勝者の道を歩んでいける。そんな未来を想像して歓喜した。
だが――――、
「壊れないサンドバッグに過ぎないわ」
よりにもよって、自身をそう作り替えた、己の上位者である吸血族の女帝によってそれは否定された。
冷水をかけられたかのように、初めて人より上の存在になれたという自身が踏みにじられた。
その言葉を肯定するように、エコーがダブルウィッシュボーンを振りかぶって障者に接近した。
そして煙で造られた平均的な人間の成人男性より小さい程度の大きさの身体をなぎ払った。
重さを支える煙の魔法は、溶けるように空間に消えて、巨大な顔は地面へと落ちた。
そしてその顔を嬲るように何度もバットを叩き付けるようにエコーはダブルウィッシュボーンを振るった。
ダブルウィッシュボーンの特性として、芯を捉えて打ち込んだ場合相手を思いきり吹き飛ばすという性質がある。
ぶっちゃけ大乱闘なホームランバ〇トである。
ダブルウィッシュボーンが顔を強打する度に、ボールのように巨大な顔はふき飛んで、壁に当たっては跳ね返ってくる。
それは壁打ちテニス（カッシュ）で遊んでいるようにも見えた。
醜い化け物と、整った容姿の大英雄という互いのビジュアルが無ければ、障者が生前されてきたいじめられっ子をボコる不良の図だった。
だが、その図を止める者は居ない。
何せ、障者は倒されるべき悪であり、倒されなくてはならないこの世界の敵であるからだ。
なまじ死なないが故に、永遠の敗者として叩き潰されなければならない運命を障者は自覚した。

此処でもなのか、どうやっても敗者でしか無いのか…
障者の中には怒りを通り越して絶望がわいてくる。
ただ、幸運か不幸かは解らないが、エコーには他者で遊ぶ気は無かった。
今後の研究素体として生かしたまま抵抗できないようにまずは心を折るか、それとも今後の火種を生まぬように殺しておこうと考えながら真剣に臨んでいた。
勿論、それを告げる事は無かったし、告げたところで障者に救いは無かった。
涙を流しながらボールのように壁に叩き付けられる巨大な顔と、今後の怪物の扱いを女帝に聞きながら障者へとバットの様に得物を振るうエコー。
自身の境遇にさえ異を唱えない彼には、化け物の人権を考える素養は欠片も存在しなかった。
「叩かれて泣いている間に、仕掛けた魔法で眷属未満その１３の知識(記憶)は安全にログを取ったわ。
後は処分して貰っても構わないわ。もう、要らないもの」
女帝はあっさりと廃棄許可を出した。
そしてその指示を受けた『うませるきかい』はダメージ某ゲームなら９９９％になった障者へと、この世界から追い出す(スマッシュする)一撃で構えていた。
野球のピッチャーの放つ剛速球の様な速度で跳ね返ってくる障者へ、エコーはダブルウィッシュボーンを縦に繋げて槍の様に構えた。
勿論、障者を突き刺してこの世界(ホーム)から退場(ラン)させる為である。

障者は絶望の中、最期まで馬鹿にされて死にたくないと願った。
その為に何かしなくてはと思った。何をすれば良いか解らなかったがそう思った。
それは――――吸血女帝が見下して要らないと断じた『何もしない負け犬』からの脱却であった。
三十三体の肉体というストックがある。

不死性と自己改変能力がある。
なればこそ、何も出来ない無能な遺伝子で生きてきた敗者の延長から、勝者の遺伝子へと自己改変する糸口を掴む事が出来た。

三十三体の肉体が十八体分の肉体へと変わる。
十五体分の肉体がアミノ酸結合の進化のエネルギーとなった。
「俺は障者(敗者)じゃない。勝者になりたかったんだ!!」
障者は不格好な天使の様な姿となった。
容姿よりもこの場では戦力強化と生き残りのための改変を優先したという事である。
足はバネの様で、両手の甲は巨大な盾の様。
顔は未だ巨大だが、盾を二つ合わせると隠せるくらいには小さくなった。舌は伸びて先がドリルになっていた。
そして、その背中からは竹箒に埃が詰まった様な翼がパラシュートの様に生えていた。
不細工な翼を広げ、急に減速した障者は自身を串刺しにする槍の手前で減速して着地すると、翼を閉じて両足で飛び上がり、逃亡していった。
エコーはすぐさま空中機動(スカイアクティブ)で追跡して始末しようとしたが、
「面白くなったから生かしましょう」
そんな事を告げた女帝によってそれを省かれた。

その数日後、二十名ほどの小さな人間の村が何者かに襲われた。
全員が死亡しており、その死体には血液は一滴も残っていなかった。
足跡が複数ある事から、犯人の吸血族は複数いると人間達は判断した。
まさか足跡が変わるほどの変化を村を襲いながら行う吸血族の可能性は低いと考えたからだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３　貴方に捧ぐピローソング

黒いオーク、黒い竜、そして吸血族の肉体を得た障者と戦ってきたエコー。
彼は間違いなく大英雄たる資質を修めている。
しかし、大英雄である以上に大英雄製造機としての方が価値がある。
植物の種を食べるより、その種を植える事で多くの種を回収する事の方が価値を生むからだ。
それによって、彼の戦歴は血統書の様なものと成り果てた。
吸血族の女帝は己が生み出した研究成果たる眷属未満その１３の思いの他の成果に喜んで、ソレーユに協力すると言ってくれた。
それは、第二、第三の眷属未満その１３の様な存在を作るという意味であったが、それによってより多く障者を知るというメリットをソレーユは理解していた。
故に、胃を痛めながら、サイコパスなマッドサイエンティストの女帝と実験を続ける事にした。

一方、『うませるきかい』は今度は人魚族の所に居た。
海を渡っている際に、船員達もろとも『うませるきかい』は誘拐された。
美しい人魚達の歌声に脳波を操られて、良くないクスリをやったかの様なエコー以外の船員達。
彼らは本来なら死ぬまで人魚達の子孫繁栄に協力する運命だが、『うませるきかい』という上位互換が居るために今回は人魚達に喰われる事になる。
エコーは当初脱出しようかと考えたが、人魚の姫がエルフ族への連絡はしたと言う事と、本来の人間の船程度の日にちで送り返すという旨を伝えられたので大人しくなった。
彼には悪に対する義憤という発想はない。

『人魚族』、それは『魚人族』とかなり古い時代にルーツを同じくするものの決別した二大海生亜人の片割れ。
女しか生まれず、異種族の男を歌声で惑わして死ぬまで自分達の繁殖の相手とする。
死ねば文字通りの意味で喰らうが、通常は死ぬまでは性的な意味でしか喰らう事は無い。
時折、相手の種族の子供が生まれた場合、魔法を使って一代限りの人魚へと変える。
男しか生まれずに、種族的な整形技術を駆使して変装し、異種族の女性を捉えては己の種族の子供を産ませ、
極々希に、相手の種族の子供が生まれたら祭壇で生け贄にする『海のオーク』と呼ばれる『魚人族』とは対立している。

ここ最近、エッラ・ヴァーリという魚人族の指導者が彼らの首都ダゴンシティを放棄し、人魚族の居住地に近いニーダゴンシティへと遷都した。
成長と共に魚人族は顎の骨が張り、顎の骨が張るほど立派な魚人族とされており、その意味ではエッラ・ヴァーリは魚人族のカリスマだった。
魚人族の大総統は失脚すれば、そのまま次の指導者に殺されるが、エッラは何と二十年間の長期政権を築いていた。
そのエッラが魚人族と人魚族の統一を掲げ人魚族を併合しようとしていた。
もし、人魚と魚人が子を作った場合、男なら魚人、女なら人魚として生まれる。
異種族と子を作った場合のみ、そのまま己の種族を増やせるのだ。
決別の切っ掛けは古代において、女性側の権力が弱かった統一種族の女性が、生まれてきた息子が不細工で殺した事で死刑にされた事だという。
同じ種族でありながら男女で美への意識が余りにも違いすぎた故の不幸だったが、これによって男性（魚人）と人魚（女性）は分裂した。

現在行われている魚人の政策に対して、文化が分れて長い年月を経って魚人を生理的に受け入れなくなった人魚は反発した。
捉えられた人魚が無理矢理「魚人達はかっこよくて良い人ばかりです」と言わされて宣伝材料とされているが、人魚で信じる者は居なかった。
美と歌と踊りで輝けば輝くほど上位に立ち、その頂点である『姫（マーメイドマスター）』であるケイヴィ・アァは特別警戒態勢を発令した。
それにより、海を通る男達は片っ端から人魚達に狙われて、子作りに協力させられた。
人間が強かったうちは大人しくしていた人魚や魚人達だが、人間の科学力への制限が発生してからはそれも無くなった。
これまでは後の遺恨を残さないために男達は時折解放されたが、今回の『うませるきかい』と同乗した船員はそうでは無い組だった。
「閣下、噂の『うませるきかい』を連れてきました。魅了は聞きませんでしたが搾精に非協力的な様子はありません」
姫なのに殿下では無く閣下と呼ばれるのは、女王では無く姫が人魚の中での最高序列であるからだ。
「えー、そうなのー？　私はケイヴィ。現在の人魚姫よ、宜しく。あなたのお名前は？」
「エコー」
「そう、エコー君か。素敵な名前だね」
凄くフレンドリーなケイヴィーだが全て演技である。
エコーもエルフの女王に心を打ち砕かれていた件が無ければ信用していたかも知れない。
満面の笑みで目をキラキラと輝かせる彼女は、偶像（アイドル）であり人形（女優）である。
男を如何すれば好意的に協力行為させられるかを知っている。
「無理矢理呼び付けてごめんなさい。
でも、私たちもそうしなきゃならないくらい追い詰められててテンパってたっていうか、訳わからなくなってて」
勿論、そんな事は無い。計算尽くである。

エルフ達には白々しくも、運航していた船が沈没していたので、遅くはなりますが人魚族が責任を持って送り届けますという手紙が送られている。
そしてその手紙(脚本)が書かれたのは、船が沈没させられる前である。
「その、何て言うか、種族のために、協力してくれると嬉しいかな。…恥ずかしいけど」
行為を口に出す事も恥じらう乙女の様だが、その実はお嬢様学校では無い女子校の様に男の目の無いところではえげつない下ネタトークをしている。
「人間とっ、マーメイドの為にっ、お願いしますっ!!」
一生懸命な女の子を演じきった人魚姫は内心で決まったとガッツポーズをする。
多分、ここまですれば落ちない男はいないと彼女は確信していた。
エコーと一緒に居た人間の男達を証拠隠滅をかねて生で食い殺しておいて人間のためというのもアレだが、
確かに魚人よりかは人間には害が小さく、覇権をどちらかが取るなら人魚の方が人間には好都合であった。
何せ、今まで住処を奪われたり、海を汚染された事で、魚人から仕掛けた戦争で魚人側が大量に殺された事を今まで黙っていたくせに、人間が弱体化してからは蟲族や吸血族がやっている様な権利を求めて、謝罪と賠償の為に人間の女を定期的に寄越す様に言っていた。
そんな魚人よりかは、人魚の方がいくらか人間にとってはマシであったのは事実だ。
人魚は弱体化しても人間との全面戦争には勝てないので、つまみ食いする程度にしておこうと考えていただけだが、それでも比較的友好であった。
自分の所持者としての権利や立ち位置を持っている相手には反乱せず、種馬である事に承諾する『うませるきかい』にはアプローチは無意味だったが、
仮にそれに気が付いたとしても人魚姫にはそれは認められなかっただろう。気が付いていても気が付いていない振りをしていたはず

だ。
ケイヴィは自分が可愛すぎて、エコーのそういう淡泊なところにまで気が付かなかった事は救いと言えるかも知れない。
下半身が魚な人魚は、異種族と番うときにはその下半身を相手の下半身に合わせて変化させる。
因みに、古代に魚人と子作りしていたときは産卵した卵に魚人が放精するだけであり、
異種族との性行為を知り、性欲の権化と為った魚人が物足りなくなった事も魚人と人魚が決別した原因である。
ケイヴィはエコーに翻弄されて優位にリードさせる事を演じたが、エコーには自分主体で行為する事は寧ろ労力的に面倒だと思えた。
どうせケイヴィの後には他の人魚達も待っているのだから、労力は少ない方が良いと考えていた。
ケイヴィが知ったらぶち切れていたに違いない。

ケイヴィが終わった後に、周囲の人魚達も『うませるきかい』と交わったが、休憩もかねてカラオケ大会が始まった。
カラオケ大会は休憩に為らない気もするが、人魚的には行わない日があっては為らない無上の喜びであるから仕方ない。
尚、歌だけで無くダンスもセットが基本なので、ミニライブ程度のレベルの高いカラオケ大会であった。

ケイヴィも何となくエコーの声は良いなと思っては居たが、無理矢理歌わせると声だけは凄く良かった。
でも、音程に合わせて音を出しているだけのエコーの歌い方には、人魚姫として赦せないものもあった。
「歌に本気なマーメイドの姫の私があなたをプロデュースしてあげるっ!!」
ケイヴィは思った。エコーは素材も声も良いのに勿体ない。
ケイヴィはいつの間にか目的を忘れていた。

エコーにはアイドル活動には興味の欠片も無い。
だが、断ってもしつこい所有者が望むのならばと、渋々それに応じる事にした。
エコーが、ケイヴィの作戦で『握手券(性行権)』をセットで売り出す事で爆発的な人気を得たのは余談である。
ただ、その握手券で人気が出たという余談には、ケイヴィの言う歌に本気な種族という自称を疑わざるを得ないとエコーは他人事の様に感じていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１４　侵攻

人魚の国からエルフの国に『うませるきかい』が返納されて五年後

『うませるきかい』をエルフの国が人間の国家群に返納するときが来た。

『うませるきかい』はエルフの国の多くの女性を孕ませており、上位貴族に関しては二・三週目を終えた者も多かった。

――――ハイエルフ増産計画の準備は此処に完了した。

後は、子供達の成長を待つだけである。

嘗ての戦争の時よりも遙かに多いハイエルフが準備できている。

そして人間の国は逆に幾つかの地方に飛び地して保たれていた領土を放棄し、最大の中央国家に統合しなければ成り立たなくなっていた。

オーク達はその勢力を大きく減らしたが、それでも首魁たる『黒いオーク』だけは未だに討たれる事無く存在しており、

誘拐された精神が壊れたエルフとの間に子を成したという、情報も流れてきていた。

障者たちからの契約を交わして黒化した存在が子を成したという実績はオーク達を大いに歓喜させ、

首魁の黒いオークに続かんと黒化していくオークや、異種族の女性を狙う熱意が増加していた。

数年前の侵攻で人魚の国の併合に失敗した魚人の国は、今こそがチャンスと人間の国を攻め入ろうとしており、

蟲族は人間が放棄した土地の一部に新たな巣を設けて、土地から逃げ遅れた人々をエサにしていた。

吸血女帝は不気味なほど動かなかったが、明らかに吸血族と思われる者の仕業で多くの種族が被害を受けていた。

その被害者達の死体は全て干からびていたが、血を通じて眷属化した者はいなかった。

人魚の国は魚人の国の侵攻を防いだ後は、エルフの国の傘下に入る

形で同盟を組む事になった。
　生活圏が違う故に、利益の奪い合いが起こりにくい事も一役買っていた。
　獣人の国は人間の国家が弱体化した事で、その経済力を再び増す事となり、その増加した資産を積極的に『うませるきかい』の借り受けに使っていた。
　それにより、エルフの国は資産で潤い、獣人の国は能力の高い子供達で潤う事になった。
　竜達には異世界にいるという神竜に逢うための、儀式に日夜明け暮れるシャヴォンヌによる、絶対的な武力による宗教体制が生まれていた。

　人間達は、魔力のある『新たな人間』を中心に、少しずつ純粋科学から魔法科学の文明へとシフトしていっていたが、
　昔からそうやって生きてきた他の種族には劣る上に、その移行による一時的な弱体化の隙を他種族に狙われる事で大きく減衰していた。
とは言え、自然発生では無く研究によって生み出された器官により、科学的に魔法を実行できる人間は他の種族とは比べられない速度で力を取り戻してはいた。
ただ、科学の力を障者によって奪われる事はそれ以上の痛手であったのである。
　世界は様変わりした。
　切っ掛けは障者であった。障者が支配者となった人間の科学文明――嘗て自分達が慣れ親しんで愛した文明の名残に惹かれ、
　周囲にいた人間達を壊し、人間の一党支配を終わらせて群雄割拠の時代に巻き戻した事が原因だった。
　昔の様なエルフの国に対して、『うませるきかい』を下賜する様な力関係は無い。
　エルフの森に多い、魔力を増やしやすい食べ物を高額で輸入したりしなければならなくなっていた。

また、最近表舞台に出てきた戸籍上の『うませるきかい』の母、『新たな人間』の生みの親であるリューン・グッドマンがエルフでありながら、

人間の国の魔法研究機関と、魔法兵士養成機関の実質的な頂点にいることも大きかった。

リューン・グッドマン、旧姓リューン・リエンシエルが王族に連なる大貴族でありながら、エルフの女王によって追放されたという事実が人間達には救いであった。

もし、その事実が無ければ少なくとも権力を人間の社会で集める途中で、信用が出来ないからと強い抵抗があったであろう。

この年、遂に人間の国に大量の障者が今までと比にならない数と勢いで侵攻を開始した。

美しくて能力の高い所謂ハイスペックな人々ほど障者に狙われた。

元がしょうも無い能力で切り捨てられた障者は、今度こそ優秀なスペックに取り憑(侵)きたい(し)と考えたのかもしれない。

転生しても以前同様不細工で無能な人生を歩みたくは無いというのは理解できなくも無いからだ。

前線ではリューン・グッドマンから学んだ魔法兵士達がその侵攻を食い止めようとしていたが、その背後や側面を亜人達が狙っているという状況だった。

人間の国は、滅亡の陰りを見せ始めていた。

「☒(☒◎☒☒※※※フッ出フ????（十五万人の敗北者達は話を聞いて貰えない～）」

「♂♀▼♂♀ＹＪＧＩ⑦唖〉。。（それより多くの正常者達は己の幸せをかみしめる～）」

「＆）（☒～～００＝＝＝＝!!!、＠、（百五十万人の敗北者達が救いを求めて練り歩く～）」

「＃〃＄〉〈？＋ＫＨＶ仮名☒ＪきＫＪり（それより多くの正常者達が

周りを囲んで石投げる～)」
「(☒ＨＬかＩ％％５ＵＧＵ７９倭唖倭唖☆倭唖（千五百万人の敗北者達が救いを求めて踊り出す～)」
「ＫＪＩヒャッヒャ（()０ｋｊ８日不降フった？０（それより多くの正常者達が彼らを囲んで撃ち殺す～)」
「度ッ㍑ぷん㎜粍（一億五千万人の敗北者達は新たな世界を歌い出す～)」
「ＵＵＵ〒３８２ー１１唖唖〒嗚＊呼唖（それより多くの正常者達は死体を踏みつけ笑い出す～)」
「怒(ＷＥＯ怒ＷＡＯ怒ヒＬＩＰＨＩＰッヒＪッフー(嗚呼赦せない赦せない)」
障者達が徒党を組んで念仏の様に呪いの歌を謳いながら、この世の地獄を見せるために行軍している。
それは悪夢だった。それは恐怖だった。それは災害だった。
彼らにどんな過去があれ、それは打ち倒さなければならなかった。
敗北者に再び敗北を叩き込んででも、今生きる人間達を助けなければならないのは当然だし、第一障者の言葉は生きた人間は理解できなかった。
それに、理解するつもりも必要も無かった。己達を脅かすのならば打ち払うのは考えるべくもない。
「撃てっ!!」
指揮官の号令と共に、飽和する程の火力の魔法が進行する障者達に放たれる。
煙が消える様に消滅する最前列の障者達。しかし、その後ろからも波の様に障者達は迫ってきていた。
「撃てっ!!」
第二波が放たれる。
再び新たな最前列の障者達は消え失せる。煙で造られた人型の様な見た目の障者は天に手を伸ばす様にして消えていく。
だが、その後ろから攻め寄る障者の軍勢は先ほどより確実に距離を詰めてきていた。

「撃てっ!!」
更なる攻撃。ここで魔力回復のために人間側の後陣と前陣が入れ替わる。
そうやってエルフの国から買い取った植物と鉱石で作られた携帯型急速魔力回復器で前陣だった者達は回復している。
しかし、そうやって弛まぬ攻撃をしていても、人間達の領土は少しずつ障者に侵略されていた。

一方、前線だけで無く軍司令部も余裕は一切無かった。
体格と良い、容姿と良い、威風が人間の形になった様な軍人の男に部下達が報告を続けていた。
「閣下、海洋から魚人の軍勢が攻めてきています」
「…暫く海産物が食えなくなるのは仕方あるまい。核を許可する」
「……はっ!!」
部下は躊躇いはしたが、直ぐに虎の子である核ミサイルを発射する様に操作員に指示した。

「閣下、吸血族の女帝が動き始めました。
例の化け物を追随させているようです。既に円卓騎士団を派遣しています」
「そう言えば今の円卓騎士団にはアレがいたな。どうせ同族相手には子を成せない欠陥品だ。
戦力として使い潰しても構わない。増援は要らぬ」
「良いのですかっ!? グッドマン閣下ッ!!」
「くどいぞ、大佐。獣人族の推薦で人権を得たとは言え、つい最近まで『きかい』の扱いだったものだ」
「失礼しました。では、その様にいたします。
では、我らの領土で巣くっている蟲族と竜族の一部に関しては如何

なされますか?」
「どうせ廃棄地域に残された住民しか犠牲になる者はいない。
奴らは活動範囲を広げる事よりも、その土地での支配力を強める事を優先する。
よって、この状況での背後討ちは可能性は低い。最低限の戦力で監視に当たらせるので充分だ」

「閣下、獣人や竜族の支配地を通過しようとする貴人の脱出経路の確保についてはどうされますか?
彼らは簡単に通してはくれないでしょう」
「金を撒いて従わぬのなら消せ。自然分解する毒ガスがあっただろう。証拠は絶対に残すな。
いや、消すのは良くないな。使うガスの種類は知性を壊す種類にしろ。障者の仕業に見せかけられる。
これを通じて奴らも戦線に引き込めれば御の字だ。
…それと、間違っても貴人達が通過するときには残存せぬ様にな」
「はっ!!」

「そうだな…、後はエルフと人魚達に直ぐ連絡せよ。
借りを返せ。すぐさま人間に協力して障者を滅するのに協力せよとな」

科学者であり、政治家でもある人間国家の軍最高指揮官ヴァンケル・グッドマンは、
言い終えると香りの良い葉巻の煙をゆっくりと吸い込んだ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１５　死の先を征く者

私は見た。
円卓騎士団第十三席エコー・グッドマン。
つい最近まで『うませるきかい』として人権を持たず存在していたもの。
彼が獣人の推薦という圧力で人権を回復した後、円卓騎士団にまで上り詰めた事を見て、それに戸惑う者や反対する者がいた。
円卓第一席アルチュールの妹である私、円卓第七席のフローラも当初はそう思っていた。
人間以外を強化する故に、人間にとって忌み子であり、生かす代わりに人権を奪われた存在。
他種族との政治手段にしか使えないので、その為に他種族の種馬として回されていた汚らわしい存在。
結論から言うと、私はその戦いに目を、心を奪われた。
最近他種族との関係が悪化してきた人間にとって、最早他種族へ利益を与える必要は無くなり、
『うませるきかい』の役割を失うのに丁度良いと、戦士の役割を与えられた彼は天性の戦士（大英雄）だった――――――

§
§

「皆さんに紹介するわ。わたくし様の最高傑作『ベルセルク』よ」
吸血女帝が連れてきたのは、かつて醜く愚かで無能だった失敗作、『眷属未満その１３』と呼ばれた者だった。
その１３やその１１９２などのナンバーでは無く、特別に名前を与

えられている事からもその価値は別格だという事なのは相対する者にも理解できた。
半年前、吸血女帝は他者からの略奪に明け暮れて、自己改変を繰り返して、強く、賢く、美しくなった眷属未満その１３と再会した。
女帝は自己進化を追求した眷属未満その１３に、嘗て己が期待すらしていなかった事を詫びた。
そして、侯爵の爵位を与えた。
今までに数えるほどしかいない吸血族の上位層に、嘗て最底辺であった者は至った。
勿論、それは愚図で無能で不細工なままの彼を無条件に肯定したわけでは無い。
彼が自己改変によって愚図で無能で不細工な己を捨て去ったからこそその栄誉が得られたのだ。
しかし、眷属未満その１３には嘗ての己を見くびっていても、現在の己を肯定してくれる美しい女がいるというだけで救われた気がした。
今の彼であれば無条件に女帝は受け入れてくれた。貴方だけのヒロインになってあげても良いという言葉に歓喜した。
ベルセルクの名前を手に入れた彼は――――それで満足した。
…結局は『それで良いんだよ』と言ってくれる人が今までに一人でもいたなら、彼はそれで良かったのだから。

だからこそ、人類への怒りでも、優生学への怒りでも無く、女帝への貢献のためにベルセルクは今人間と対峙する。
その瞳には冷静な狂気が停滞している。そこに嘗ての面影は無い。
彼は最早眷属未満その１３ではなく、『ベルセルク』なのだから。

円卓騎士団の末席を手に入れたエコーの前に、黄金の髪、黄金の瞳、黄金の翼、黄金の天輪を兼ね備えた神々しい青年が立っていた。

女帝を護る様にその前に立つ彼を、自慢する様に女帝は紹介した。
そして、エコーにはこの男がわかるかしら?と女帝が告げたがエコーには見当が付かなかったので、かつて眷属未満その１３であった事を女帝はネタばらしした。
もし、現在にまで至ったベルセルクと人魚姫が会えば、吸血族故に子供を作る事は出来ないが都合の良いガードマンとして使われていただろう。
だが、人魚姫より先に吸血女帝がベルセルクと再会した事はある意味ベルセルクにとっての救いであった。
ただ完璧に近づいた性能を利用しようとする人魚姫よりも、
底辺からここにまで至った成長値を賞賛する吸血女帝の方がベルセルクの元になった存在が嘗て望んだ在り方だったからだ。
今回人間側が派遣した戦力は円卓騎士団の第四席、第七席、第十二席、そして第十三席の四名だけだった。
しかし四名だけで大抵の敵は倒し得ると思われるほどの過剰戦力(大英雄)でもあった。
だが、最初にベルセルクに飛び込んだ第四席は腕の一振りで壁へと叩き付けられ、その直後に鋭利な杭の様な魔力弾で串刺しにされた。
かろうじて生きているものの、そのままでは長くは無い事は誰が見ても解った。
第四席を警護し、魔法で回復するために第七席と第十二席が駆け寄ったが、そこでベルセルクが放った杭が変化して三人を覆う檻へと変化した。
そしてベルセルクはただエコーを見つめる。
ベルセルクは十字架型の剣を背中の鞘から抜き放ち、エコーは二つの魔力の筒、ダブルウィッシュボーンを展開した。
そしてエコーとベルセルクはその世界から消えた。
厳密には世界から消失はしていない。だが、高速のその先に居るものだけが視える『無の領域』に彼らはいる。
その世界を視認できぬ者には、動いている彼らの姿を認識する事は出来ない。

二者が通った後の大地を熱が奔る。
二者が切り結ぶ度に大気が震える。
二者がその魂を、魔力を跳ね上げる度に世界が嘶く。

「素晴らしいわ、そんな貴方が大好きよ」
女帝がうっとりする様にそう呟く。
彼女の騎士、ベルセルク侯爵はそれに応えようと全力を更に巻き上げる事は無かった。
もとより彼女を護る為の闘い。最初からトップギアのその先だったからだ。

対するエコーも最初から空中機動（スカイアクティブ）、先行投資（ダブルウィッシュボーン）を起動させ、その魔力回転数は１２０００ｒｐｍ。
台風すら対消滅させられる個人における限界を超えた速度であり、人間の限界のその先を行っていた。
故に両者は常に『無の領域』で激突する。
最早女帝にすら視覚での認識は不可能だろう。
それでも二人の闘いを認識できている女帝は流石闇の支配者と言えた。
エコーは殆ど身体強化にしか魔力を回せない。
だから回転数をひたすら上げるしか無い。
しかし、更なる効率化の手段があるはずだった。
ここ数年で一般式魔力器官が大幅な燃費改善を遂げた。ならばヴァンケル式魔力器官にも更なる向上方式はあるはずだった。
だが、魔力器官というのは普通なら生まれたときに決められている。遺伝子操作で人為的に作られるものだからそれは当然だった。
だが、それが如何したというのだ。常識の中の限界で満足するのならそれは大英雄で無く只の英雄に過ぎない。
エコーは自身の魂が悲鳴を上げる事すら無意味と断定して、小さな魔力器官を己の中に生成した。
ヴァンケル式の魔力器官を小型化して、常に低負荷で全力回転させ

る事で予備魔力を生成する魔力補助システム。(レンジエクステンダー)
その力は、限界の限界で拮抗していた二人の天秤を傾けた。
十字剣ごと叩き切られ、その勢いで壁に激突して無の領域から帰されたベルセルク。
それを冷たく見つめる様に魔力の筒を構えたエコーが同じく無の領域から帰ってきていた。
「やったのっ!?」
希望を見た様に円卓の七席が叫んだ。
だが、それは早すぎる安心だった。

死者は死なない。ただ変化するのみ。
ベルセルクは己の肉体を、己の記憶を、己の精神を、己の魂を改変して今の場所にいる。
元の全ては強さのために捧げた。
だが、未だ捧げていないものがある。
己の存在そのものだった。
ベルセルクは、より強い自分のために今まで積み上げてきた自分を捧げた。
これまで重ねてきた苦労や苦悩も全て無意味と化し、生まれ持っての強者に再誕する。
吸血女帝でさえ為し得なかった、成そうとは思えなかった領域に彼は届いた。
その根源は、女帝へ捧ぐ愛の誓いとも言えた。

その両目は潰れ、全てを見通せる様になり、
その両手は崩れ、全てを握れる様になり、
その両足は腐り、全てを歩める様になった。
最早、生物でも死物でもあり得ないその姿は神に近いと言えた。
その証拠に少しずつこの世界との繋がりが薄くなり、暫くすれば別の場所、神世界と呼ばれる場所へとその身を移すであろう。
だが、それまでに目の前の敵を倒す事が出来ればそれで良かった。

女帝を護りきって消え去るならそれで良いと感じていた。
嘗ての過去形となった数分前まで理解していた己からの言伝がベルセルクには残っていた。
その手に、因果を支配する槍を精製する。
必中の槍を一つだけで無く、周囲に幾つも創り出し――――――全方位に投合した。

全ての方向からエコーを狙う神槍。
但し、その速度は∞では無かった。
ならば――――――避けられない事も無い。
そう判断したエコーは『無の領域』へと身を滑らした。
再び並の大英雄なら見過ごしてしまう速さへと移行する。

仕留められる前に、撃ち抜く。
ダブルウィッシュボーンを縦に連結してベルセルクに突き刺そうとしたが、ベルセルクはエコーの後ろから新たな槍で突き刺す事でそれを防いだ。
エコーが突き刺そうとしたベルセルクは残像だった。
無の世界で残像が認識される程の速さ。
それはあり得ない事を前提として尚、あり得ない事だった。
無の領域所か、既に神の領域に片足を突っ込んでいるベルセルク。
時間が経てば完全に神の末席として容量不足のこの世界から消える。
そんなベルセルクだからこそ、己とエコーが嘗ていた無の領域如きでは遅すぎると言えた。
エコーに対抗する手段は一つ。
ベルセルクと同じように神の領域の力を手に入れる事。
自己改変能力も、異なる世界の認識も無いエコーにとってそれは無茶無理無謀だった。
故に全力で嬲られる。
本気で殺しにかかっているベルセルクに辛うじてのところで命を

繋いでいる。
まるで使い捨てのティッシュの様にその命を縮めていた。
それでもエコーは神に祈らない。神だけでは無く誰にも祈らず、救いを求めない。
だから誰にも救われない。

そんなエコーを祝福する者は――――――――いた。
嘗てエコーが殺した黒い竜。その血にほんの僅かに残る竜が神であった頃の欠片が向こうの世界にエコーを繋げた。
『頑張って■■』
聞いた事が一度も無いのに、何故か理解できる声が、その声の主本物の神が彼に力を与えた。
人間ではあり得ない、竜か何かの様な生命力でエコーの傷が巻き戻り、彼の瞳は完全に開ききった瞳孔で己の敵を見つめていた。
エコーは、疑似的な神の領域を足場として、無の領域の先の先へと踏み込んだ。
身体の感覚すら無く、視界は果てにある光を見付けている。
エコーはその果ての光へと跳躍し、その先へ己の得物を突き出した。

神の領域へ完全に押し出されて、二度と元の世界に戻ってこれなくなったベルセルク。
そんな己の完成品を越えた作品の敗北を知覚して、「嘘よ」と呟いた女帝は膝をついた。